



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | フランシス・ベーコン研究（三）：natura と tempus                                                   |
| Author(s)        | 花田, 圭介                                                                            |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 15(1), 97-159                                                         |
| Issue Date       | 1966-12-10                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33310">https://hdl.handle.net/2115/33310</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 15(1)_PR97-159.pdf                                                                |



フランス・ベイコン研究(三)

—natura と tempus—

花  
田  
圭  
介

## フランシス・ベイコン研究 (二)

*Non canimus surdis, respondent*

*omnia sylvæ. — Vercilrus, Eclogae, X. 8.*

花 田 圭 介

### 一、主題と資料

1・1 わたしは、さきに、ベイコンの哲学上の著作の真意をおしはかる手だてとして、かれの時代と生涯とにたしかえって、この多面的な哲学者の秘密を探った。その試みのなかで、かれの幼少時代の思想のかまどともいふべきものがカルヴァン派的傾向のつよいアングリカン家庭のそれであったこと、他方ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ在学中（一五七三—一五七五年）には、同コレッジの長ホイットギフト博士の指導のもとでルネサンスラテン文辞学者にも比肩し得るほどの古代人文の知識を身につけたこと、について述べた。<sup>(1)</sup> それらは、大局的に見れば、当時の新しい二大思潮であった宗教改革と人文主義との合流のうちでベイコンの思想がはぐくまれたことを示している。これをイギリスについていうならば、イタリヤに学んだのち母国の宮廷と大学とに人文学を移し入れたグロシン GROCYN (1446?-1519) やリナカー LINACRE (1460?-1524) に始まる人文主義と、さらにそれを母国の教会生活の浄化に役立てようとしたコレット COLETT (1467?-1519) に始まるいわゆるイギリス宗教改革との、二潮流である。ベ

### フランス・ペイコン研究(三)

アイコンと同時代のイギリスにおいて、かつてルネサンス人文学の典型であったフィレンツェのプラトン主義はフラッド Fludd (1574-1637) 等の神秘的魔術に墮し、<sup>(2)</sup> アングリカン教会の内部は次の世紀のピューリタン革命へ向かつて渦巻いていた。そのなかでペイコンは自分の道を切り開き、それがヨーロッパの近世哲学の大道につながったのである。ペイコンは述べている。「われわれの救い主は『あなたがたは、聖書も神の力も知らないから思いちがいをしている』といい、まちがいを犯したくなければ読むべきものとして、われわれの前に二つの書または巻を置いてある。第一は、神の意志をあきらかにしている聖書であり、次は、神の力をあらわしている被造物である。<sup>(3)</sup>」そして、「神の意志についての教示」(神の啓示)と「神の力についての省察」(自然の光)とは、かたく不可分に結びつけられるべきであり、しかも「心迷わずに、ただ信仰に属するところのものを信仰にゆだねるならば、それはきわめて健全である」。<sup>(4)</sup> これらは、知識と信仰、科学と宗教との関係にかんして、それまで神の栄光のためにかえって、聖書を引照し、神の意志のためにかえって自然を援用してきた、従来のカトリック人文主義のシンクレティズムからの脱却を示唆するものである。<sup>(5)</sup>

このようなバースベクティヴのなかで見ることによって、初めて哲学史におけるペイコンの役割りとその位置とがいつそう明確なものになるであろう。

これまでも指摘されているように、<sup>(7)</sup> いわゆるペイコンの実験哲学は、同時代のイタリヤ自然哲学者、とりわけ感覚主義的傾向のつよいテレシオ等の著作との直接的な接触を有力な条件の一つとして、そこから生まれたものである。ペイコン自身も、「たいした深みはないが良識に富んでいる牧歌的哲学であるテレシオとその弟子ドニの哲学、なんの新しい哲学もつくりなさいと言いながら古い哲学に対して自分自身の考えの絶対性を示したフラカストロの哲学」、「プ

ラトン主義者たちの臭気を昇華したパトリックの哲学」を、同時代の記録に値する哲学としてあげている。<sup>(8)</sup> 其上、イタリアルネサンス期の哲学史研究の最近の成果が示しているように、これら一六世紀のイタリア自然主義者たちは、それ以前のフィレンツェアカデミチやパドヴァ派に対して、古代派に対する近代派として、学風上明らかにベイコンにつながる面をもっているのである。<sup>(9)</sup> しかしながら、こうした同時代の、しかも親近の学風のなかにあって、なおかつベイコンの特徴となっているものは、先述の行動<sup>(10)</sup>の知恵の見地から切り開かれた、「神」と「業<sup>わざ</sup>」との新しい概念にもとづく「実験」の把握である。パドヴァ派以来近世哲学の根本課題の一つであった人間精神の統一性の確立において、「理性」と「啓示」とを統一するベイコンのしかたの独自性もまたそこからきているように思われる。わたしの知るかぎり、ルネサンス期の哲学者のなかで、行動のもつ真実の高貴さをベイコンほどラディカルに承認したものはいない。コロンブスの新大陸発見にちなんでベイコンはこう語るのである。「この新しい大陸からの希望の微風がはるかに弱くかすかであつても、…なおやはり試してみなければならぬのだとわたくしは決心する。というのは、ことを試みずに失うものと不成功で失うものとは比べものにならないのであつて、試みない場合にはまったく大きな利益がのがされるのに、成功しない場合にはただ人間の努力がほんの少しむだになるだけだからである」。<sup>(11)</sup> 後に本論で詳しく論及するように、行動には実効的効力の価値をこえたそれ自体の価値が認められるのである。したがって、同じくテレシオの感覚論的自然主義から出発しながらも、知識の確実性の保証を自己の存在についての内的な直感知（「隠れた感覚」）に求めた、同時代イタリアのカムパネッラ、それを継承するフランスのデカルト等の哲学との隔たりは——多くの同時代的な共通点にもかかわらず——はなはだ大きいといわねばならない。<sup>(12)</sup> また、視野をイギリス一国に限っても、ひき続く時期におけるルネサンスⅡプラトン主義の継続としてのケンブリッジⅡプラトン派<sup>(13)</sup>

# フランシス・バイコン研究 (三)

の優勢を見るならば、バイコン哲学の上述の特異性はきわめて明らかである。

- (1) 「研究 (一)」 一・一 参照。(引用個所の略称については、本紀要第二三号の「フランシス・バイコン研究 (二)」二二—二四ページ注 (5) および (7) を見よ)。
- (2) フラッシュ FLUDD (1574-1637) の神秘的魔術に対するバイコンの批判と解されるものには、たとえば次のようなものがある。「ところが最近二、三の人びとはまったく軽薄にもこのような虚妄に耽って、創世紀の第一章やヨブ記やその他聖書の諸書によって自然哲学をきずくことに努力している」(N.O., I, 65)° cf. N.O., II, 38; D.A., II, 13.
- (3) A.L., I, 6, 16. 引用文中『あなたがたは云々』については「バイコン福音書」XXII, 29 参照。
- (4) N.O., I, 89. cf. A.L., II, To the King, 3; 5. I.
- (5) N.O., I, 65. cf. A.L., II, 6. I. 「バイコン福音書」XX, 21. 「バイコン福音書」XX, 25 参照。
- (6) バイコンは、宗教と哲学との混同は相互の侵害をひきおこし、この侵害はやがて「異端的な宗教」と「空想的で寓話的な哲学」のもとになる<sup>1)</sup>と述べている。A.L., II, 6. I. cf. A.L., II, 24, seq.
- (7) たとえば FISCHER, Francis Bacon und seine Schule, S. 15.
- (8) A.L., II, 8. 5. cf. N.O., I, 116; A.L. (ed. WRIGHT), p. 300.
- (9) たとえば KRISTELLER, Eight Renaissance Philosophers, p. 199.
- (10) 「研究 (二)」 2・2・3° 一九ページ参照。
- (11) N.O., I, 114.
- (12) バイコンとデカルトとの比較は、ラランジュの比較資料の収集(一九一一)に始まって、シルソンの『方法箴説』注釈(一九二五)で発展させられ、ROTH, Descartes' Discourse on Method, p. 64-65 以下を参照。cf. HUBERT, Descartes et Bacon, resemblances et differences, Revue Synthèse, XIV (1937), p. 29-50; CARBONARA, Scienza e filosofia di principi dell'età moderna, Galileo, Bacon, Cartesio, pp. 117-260. さらにデカルトは科学研究によって促されたレアリズムの面でバイコンに近いが、本来の姿はイデアリストであると考えられている。
- (13) 「研究 (二)」 二二—二三ページ注 (c) 参照。

1・2 さきにわたしたちは、バイコンが一六二五年九月フルゲンツィオ神父あての手紙のなかで「四〇年間……『時の最大の生産』と題する主題について思いめぐらしてきたと述懐していることについて述べておいた。<sup>(1)</sup> この「四〇年

間」すなわち一五八五年から一六二五年にかけてその内容が形づくられてきたペイコンの生涯の仕事は、先述のとおり、特に一六〇三年ごろから一六二〇年ごろまでのあいだに『学問の大革新』(Instauratio Magna Scientiarum)の構想として成熟したものである。一六二〇年一〇月に公表された「ノヴム・オルガヌム」はただその一端にすぎないのであって、その時期のペイコンの断片的諸著作の集大成によつてのみはじめてペイコンの構想の全貌を推し量ることができるのである。しかし、このことはまた、かれの新構想が資料としてもっともまとまった形で述べられているが、ほかならぬその『ノヴム・オルガヌム』であるということ<sup>(2)</sup>を反面で示している。したがって以下本論においては、上記の哲学史的パスベクティヴのうちにペイコンの哲学文献とりわけ『ノヴム・オルガヌム』を据えて、そこに表現されている思想内容を説明していかなければならないであろう。これは今まで『ノヴム・オルガヌム』が長いあいだ方法論の単独の著書として取り扱われ、その範囲内でペイコン研究が進められてきただけに、従来の研究史との関係で多少の困難を伴う。わたしは、さきに、あの有名なイドラ論が今日のいわゆる非実証観念の誤謬の批判であるよりもむしろ人間の怠惰な傲慢を挫くものとして解釈されるべきこと、また現在科学哲学の角度から興味を抱かれる「実験」概念もペイコンにおいてはなお「業」の概念との関連で解釈されるべきこと、について問題を提起しておいた<sup>(3)</sup>。以下の説明においても、それらを分析の焦点の一つとしなければならぬであろう。それゆえ、わたしは、「近世認識論の経験主義的始祖」としてのペイコンという規定から出発したペイコンの——認識論史の枠内での——研究史<sup>(4)</sup>の延長線上で仕事を進めるよりも、かえってむしろ一九世紀後半の『ノヴム・オルガヌム』をはじめとする諸著作の註釈者たちの一見古めかしい仕事を再吟味することに力を注がねばならなかった。したがって本論は、ある一定の理論的解釈でペイコン哲学の細部までを割り切ることには、あまり関心をもたない。しかしながら、このような一見たいく

つな原典の検討のうちから、本論の結果として、ベーコンにおける「光の父」なる神、「自然の光」、「時」などの概念があるみに出され、自然と時との矛盾こそがかれの学問分類はおろか、かれの哲学思想全体のうちに働いていた生きた原理であつたのではないかということが暗示されるはずである。

(1) 「研究 (一)」 一・2 参照。

(2) 初版は一六二〇年ロンドンで *Instauratio magna, pars secunda operis quae dicitur Novum Organum, sive Indicia vera de interpretatione Naturae* として出版され、一六四五年アムステルダムで初めて *Novum Organum* として独立に出版された。なお、A.L. は、どちらかといえば、それまでの諸学の伝承内容を整理することに重点がおかれているのである。

(3) 「研究 (二)」 2・3 参照。

## 二、テキストの性質

2・1 ベイコンのテキスト——なかならず『ノヴム・オルガヌム』——は、そこに表わされている思想の内容と動きを分析し整理するにあたって、あらかじめ注意しておかなければならないことがある。さきにも述べたとおり、ベーコンの哲学の内容はまだ体系化の段階に至っていない、アフォーリズムで表現されるのにふさわしいものであるために、それに応じて、かれにおけるアフォーリズム形成の新発想を追う方法をとらなければならないのである。<sup>(1)</sup>

ベーコン自身も、各部分がいわば「あき箱」(capsulae inanes) のようにからっぽであるのに、あたかも完璧な学

(4) トインビーは、FISCHER Francis Bacon und seine Schule, 1886; LIBBIG, über Francis Bacon von Verulam und die Methode der Naturforschung, 1863, トインビーは RÊMUSAT, Bacon, sa vie, son temps, sa philosophie et son influence jusqu'à nos jours, 1858, イギリスでは WHEWELL, On the Philosophy of Discovery, 1860; ABBOTT, Francis Bacon, 1885 に始まるベーコン研究は、多かれ少なかれ本文で指摘した枠にしばられている。

問体系であるかのように見せかけるスコラ学の奸計に対して、「真理の最初にして最古の探究者たちは、いっそう誠に幸運に (*habe et fero*)、かれらが事物の考察から集め使用のために貯えようと考えた認識をアフォリズム (*aphorismos*) のかたちにまとめるのが常であった」と述べている。かれによれば、アフォリズムとは、「短く断片的で、方法 (*methodo*) によって整然とつながれていない文句」のことである。<sup>(8)</sup>

ベイコンは、ただひとりだけの人間の力では全知識を完成することがとうてい望めない以上、知識を伝達する方法は学問論の重要な課題の一つであると考えた。かれによれば、その「伝達の方法」 (*methods of tradition*) は、知識使用のための方法と知識進歩のための方法とに区別される。前者は、知識の結果を被伝達者にもっともらしく信じさせるように伝えるしかたで、いわば「根のない木の美しい幹の運搬」であり、これに反して後者は、知識の根底にまでたしかえてそれが成長したとおりに、いわば根ごと移すやり方である。ベイコンは、「もし諸学を成長させようと思うのならば、根を堀りおこすことによく注意しさえすれば、木の茎や幹はたいして問題にならない」といっている。<sup>(9)</sup>そして、かれによれば、綱要式の (*in methods*) 伝達のしかたよりも、アフォリズム式の (*in aphorisms*) 伝達のしかたの方が、そのためにいっそう適している。<sup>(10)</sup>事実、かれの著述は主としてこうした表現形式によっているのである。したがって、わたしたちがベイコンのテキストに表わされている思想内容を分析整理していく場合にも、そこでかれによって故意に省かれていた綱要式の「関連と順序」 (*connexion and order*) をしいてつづけることにはなく、それらがいかなる「学の心髄」 (*pith and heart of sciences*) から発想されているかに、まず注意が払われなければならないであろう。<sup>(11)</sup>

(1) 「研究 (二)」はしがき参照。

(2) 知識はアフォリズム形式のあいだは発達しつつづけるが、き

# フランシス・バイコン研究 (三)

ちんとした論述形式に収められるとはや内容が固定される、とバイコンはいっている。AL, I, 5. 4. 形成途上の知識を伝達するしかたとしてアフォリズム形式が適当であることについて、D.A., VI, 2 (Vol. I, p. 665-666) でやや詳しく述べられている。cf. WALLACE, Francis Bacon on Communication & Rhetoric, p. 62.

(3) NO, I, 86.

(4) AL, II, 17. 4.

2・2 さらに、さきにも述べたように、一六〇五年に公表されたかれの著書『学問の進歩』は、当時の読者層にあまり歓迎されず、そのためにバイコンは、一般に受けいれられている古来の学説とは縁のない新しい観念を誤解なしに他人に理解してもらうことがいかに困難かを、あらためて思い知らされたのであった。<sup>1)</sup>しかし、このようなことは、それ以前にもかれ自身新しい知識の伝達のしかたに関してかなり考えさせられていたところであったように思われる。すなわち、その著書自身のなかですでにバイコンは、「その諸概念が一般にひろく理解されているところの人たちは、ただ証明しあるいは論争しさえすればよいが、その諸概念が一般に理解されていない人たちは、二重の苦勞をしなければならぬ」とし、その一つは自分の考えをのみこませることであり、もう一つは証明し論証することである、といっている。そして、そのような場合には、「自分の考えを表現するために比喩 (similitudes) とたとえ話 (translations) にたよらざるを得ない」というのである。<sup>2)</sup>したがって、バイコンのテクストのなかで駆使されている多くの巧妙な比喩は、たとえそれらが論証になっていないにしても、上述のような角度から尊重されなくてはならぬ

(5) AL, II, 17. 6.

(6) バイコンは、綱要式の敘述がつまらぬ材料を立派に見せかけることを警告し、「順序 (series) と配列 (juncture) は大きな力をもっており、凡庸なことからとられたものに光彩を与え、<sup>3)</sup> 下りうホラティウスの文章 (HORATIUS, Ars Poetica, 242) をひいている。これに反して、「アフォリズムは、嘲笑されるべきものでないが、諸学の心髄からつくる以外にはない」のである。AL, II, 17. 7. cf. WALLACE, op. cit., III.

いであろう。以下の分析整理にあたっても、わたしは、ベイコンが好んで常用した比喩のいくつかについて、特に言及するはずである。

- (1) 「研究 (一)」 一・三 参照。cf. WALLACE, *op. cit.*, IX.  
(2) ベイコンは、アリストテレスが「もしわれわれがほんとうに  
論争しようとして比喩を探そうとしないなら云々」(*Eth. Nic.*,

VI. 3) といって相手を非難している個所について、そうした  
「非難」は実はその相手を称揚していることになるのだ、とい  
っている。A.L., II, 17. 10.

2・3 第三に、ベイコンの新しい哲学をスコラ哲学などの伝統的な哲学学説との対比において見ていく場合に、「伝達の方法」について、なお次のことに注意しておかなければならない。スコラ学は、その学説の伝達にあたつては、前記の知識使用のための伝達方法の一つとして、「問題を提起してその解決を下す」(by questions and their determinations) 論法をとっている。<sup>(1)</sup> すなわち、相手方のどの命題あるいは主張にもそれぞれ反対論をたてて、これらに解答を与えていく論破のしかたである。ベイコンは、クゥインティリアヌスがセネカについて下した、あの「ことばの細かい区別だてによって、ものごとの重みをこわす」という批評をもじって、スコラ学者たちに対し、「かれらは問題の細かい区別だてによって、知識の確実性をこわす」ものだといっている。<sup>(2)</sup> かれによれば、そのような一つの論駁は、ちょうど小さな保塁や陣地を一々包囲することに似て、かえって軍隊の総前進をはばむものであり、作戦の主要目標に向かってまっすぐ進むことによって、むしろ小さな保塁や陣地はひとりでに降伏するものだということを知らない戦法である。<sup>(3)</sup> それに対してベイコンは、かれの新哲学を伝達するための論法として次の点に注意をはらっている。すなわち、「諸学の伝達において、論駁 (confutation) の使用は極力控えなければならない。そして、根強い先入観および偏見を除くのに役立つようにし、論争と疑惑を生みだしきかたえないようにしなければならない」<sup>(4)</sup> の

である。

(1) *AL*, II, 17. 7.

(2) *AL*, I, 4. 6. クウインティリアヌスからの引用句は *In-*

*stitutio Oratoria*, X. 1 に見られる。

(3) *AL*, II, 17. 8.

(4) *Ibid.*

### 三、解釈上の問題点と中心テキストの整理

#### 3・1

『ノヴム・オルガヌム』がその第二部になっている『学問の大革新』全体の意図は、後年にカントがその『純粹理性批判』第二版のモットーとしてその「序言」から引用した句によって広く知られている。すなわち、その個所でペイコンは、『大革新』においてかれの企てたことが臆見 (*opinio*) ではなくて事業 (*opus*) であり、学派 (*secta*) や教説 (*placitum*) の定礎ではなくて人間の有効性と偉大さ (*utilitas et amplitudo humana*) の定礎である語り、各自の便益には公平にして共通の利益を考慮するように訴えているのである。言わんとするところは、さきにペイコンの根本思想について述べたことから、すでに明らかであろう。<sup>(1)</sup>つまり、人類共通の利益のために自然に対する人間の支配権を確立するには、臆見によって他人の同意を支配し学派をつくって争うのではなしに、自然の導きに従って発明の事業をおこすべし、<sup>(2)</sup>というのである。ペイコンは、それをきわめて簡潔に、「精神と事物との交わり」 (*commercium Mentis et Rerum*) の回復と要約している。<sup>(3)</sup>

ところで、カント第一『批判』へのある注釈者は、なおこれに付け加えて、同『批判』への適当なモットーとしてペイコンの同じ「序言」から特に次の二箇所をあげている。<sup>(3)</sup>その一つは、「序言」冒頭の「わたくしには、人がその

資力 (ops) をも能力 (vis) をもよく知らず、実は前者を過大に、後者を過小に見ているように思われる」という句であり、もう一つは、他人に教えを垂れるさいの謙虚な態度について「事物そのもの (res ipsa) と事物のつながり (rerum foedera) へ導く」ことを説き、「そして、かようにしてわたくしは、経験的能力と理性的能力との真実で適法な結婚を永久にかためたと考える……」と述べている箇所である。前の句は現有の学問技術に慢心して知能のいっそうの開発と実現を怠ることを戒めたものであり、後の句は理性による認識を経験によって事物そのものに至らせるべきことを説いたものである。これらがカント『純粹理性批判』のモットーとして特に適当なものであるかいは、そもそもその『批判』をいかなるものとして把握するかによるであろう。今はこのことが問題ではない。ただ、注釈者がカントをベイコンと関係づけるにあたつて、認識論の学説史の枠に視野を限っていることが、そこからは見えるのである。<sup>(1)</sup>

3・1・1 このような傾向は、いわゆるイギリス経験論の哲学史研究ではさらにいちじるしく、ベイコンと同国のものであるだけに、ベイコン哲学の史的理解に対して致命的な影響を広く与えているように思われる。たとえば、こんにちでもその分野で基本的な文献とされているソーリーの『イギリス哲学史』においては、ベイコンが——「他の誰よりも、知性を先入観念から解放して偏らない事実研究へ向けた」とされながらも——かれの新哲学の実現のために協力を呼びかけたのに哲学および諸学のいづれにおいても「学派をつくりださなかった」し、「ベイコンの死につづく時期に属する哲学上の著作は、かれの影響の跡をほんのわずかしか示していない」と断定されている。<sup>(2)</sup> ベイコンの影響が当時の哲学学説の上にあまり現われていないというこの事実から、さらにモリスは、「ベイコンはとりあげるべき問題に真向うからとりくまなかったのだ」と結論し、次のように述べている。「かれと同時代のハーヴィは

ペイコンについて『かれは大法官のように哲学を書いた』といったが、たしかにかれは、精密科学の本来の方法を反省しながら、それらの科学についてはほとんど知らなかった。コペルニクスの理論がガリレオやケプラーによって確証されているまさにそのときに、その理論につよく反対した。恐らくこのために、かれはロックやカントの批判的氣質をまったく欠いていたのである<sup>(6)</sup>。つまり、「かれは近世哲学のまさに心髄である問題を提起することができなかったのである<sup>(6)</sup>」。このように、いわゆるイギリス経験論哲学のうちでロック以後を、そればかりかホッブズをもペイコンから切り離すことが、近世イギリス哲学史研究における、かなり長い間の慣わしにさえなっているのである<sup>(7)</sup>。

これらの諸解釈において、いわゆる「近世哲学のまさに心髄である問題」とされるものは、一体いかなる問題であろうか。それは、自然認識における人間の認識能力の限界をあらかじめ検討するという意味での「宇宙に対する精神の関係の問題」であり、一七世紀に「神と宇宙とについての信念を新しい科学理論と一致させる企てを開始せざるを得なかった」事情から必然的に提起されたところの問題である。ペイコンは、この近世認識論の問題に関して、何一つ語るに足る伝統(tradition)、学派(school)をつくり出さなかったというのである<sup>(8)</sup>。

たしかに、ペイコンが実際の自然研究において到達し得た成果、すなわちかれのいわゆる「第一の収穫」は、なおかれの古色を帯びた自然概念に色づけされたものであって、これは、周知のとおり、『ノヴム・オルガヌム』第二部における熱の「形相」および「原因」に関する例証的説明がよく示している<sup>(9)</sup>。そればかりでなく、かれは、発明によい関心を抱いていたにもかかわらず、ケプラー、ガリレオの新力学と同じく、ネーピアの対数をも知らなかった。この点では、ガリレオ力学にもとづく自然概念の形成へと進みでたホッブズ、デカルトとははっきり区別されなければならぬ<sup>(10)</sup>。さらに、一七世紀ヨーロッパにおけるペイコン文献の流布が前記アムステルダム版『ノヴム・

オルガヌム』をはじめ自然誌、実験誌関係のものを中心として行なわれた事情は、<sup>(12)</sup> ベイコンを見る目の視野を自然研究やその方法に限ったとしても、あながち無理なことではなかった。事実、『大革新』第二部をなす『ノヴム・オルガヌム』は、ベイコン自身いつているように、「事物の探究における理性のよりよくいっそう完全な使用 (usus rationis) と知性の真の補助 (auxilii intellectus) についての学説」にほかならないからである。<sup>(13)</sup> さきにわたしは、この『ノヴム・オルガヌム』に関して、ベイコン学説中いわゆる「イドラ論」「帰納法」や「法則概念」がベイコン解釈の一定の傾向のもとでありにも有名なテーマになっていることに言及したが、<sup>(14)</sup> それはほぼ上述のような諸事実にもとづいた認識論史上の悪名によるものだったのである。

3・1・2 しかしながら、近世認識論学説のうえで、ベイコンがなにつ伝統や学派を創始し得なかったという批評は、かえって、ベイコン自身の本来の意図にかなうものであったように思われる。なぜなら、前掲のカント引用にかかわるベイコンの句にも示されているように、かれの意図はもともと「学派や教説の定礎」にはなかったからである。しかも、これは、ルネサンス期の哲学者たちのあいだで、あるいはかれらに対してベイコンが意図的に自己を特徴づけた点である。かれは、恐らくルネサンス期のイタリア哲学者たちを主に念頭において、次のように言っている。「ところで、いっそう大胆に万事を新規にひきうけ、知能をぞんぶんに働かせ、それまでのものを打倒し破壊することによって自分自身と自分の学説 (placitum) の進む道を開いた、そのような人たちもいたが、かれらの大騒ぎも大したものを生みださなかった」<sup>(15)</sup>。かれらは哲学を進めずに、ただ学説を変えただけだというのである。ベイコン哲学の影響は、したがって、あれこれの認識論学説や学派をこえたところに求められねばならぬであらうし、また事実そのようなものとして見いだされるであらう。かような意味において、それは実にまた認識論そのもののうちにも

見いだされるのである。

たとえば、広く使われているロック『人間悟性論』の編者プリングル・パッチソンは、その「序論」でロックがペイコンと無関係であると断言しながら、ロックが理性の補助として伝統的な推論法に発見法 (making new discoveries) を対置した点でペイコンと共通していると注釈しているが、<sup>(16)</sup> 知性に正しい補助 (helps) を与えてそれを改善するという考え自体 (Book IV) やらに「本有観念」や「語の誤用」に対する批判 (Book I, III) も、根本的にペイコンと共通するところである。<sup>(17)</sup> それにしても、なお、人間の認識能力の限界の吟味としての「認識と存在との究極的本性」の問題に関して、また一七世紀にそれを不可避にした信仰と科学の問題に関して、ペイコンはまだ問題以前であったと考えられるかも知れない。しかし、前に述べたように、『大革新』の主題は端的にいつて「精神と事物との交わり」の回復にあったのであり、しかも、その「交わり」についてペイコンは次のように言っているのである。「…わたくしは、精神と宇宙との結婚の床を、神の善性 (divina bonitas) を付添いとして、しつらえ飾ったと考える。ところで、結婚歌の祈りとして、わたくしは、この結婚から、人間の助けとなるものと、人間の困窮と悲慘をいくらかでも軽減するような一連の発明が生まれてくることを願う」。<sup>(18)</sup> 信仰と知識の問題、またそこから生まれる人間知性の認識能力の範囲の問題は、ペイコンにあっても同じく深刻な根本問題であったといわなくてはならないであろう。

さらに、このことは、「理性のよりよくいつそう完全な使用と知性の真の補助」を扱う、すぐれて認識論的な『ノヴム・オルガヌム』についても同様である。当時現有の諸学の概観として、いわば「旧大陸の沿岸航行」にもなぞらえられる『大革新』第一部に対して、この第二部は、いわば新世界の発見のために「大海に乗り出せるように人間の知性を装備する」こと、「自然のいつそう遠い隠れたもの」 (remotiora et occultiora) に到達するための、学問的な

認識の方法論である。そこでは、實際の大洋航海においてたんに星の観察だけでなく羅針盤が必要とされたように、人間の知能の「練習、瞑想、観察、議論」だけでなく、それ以上の、まだ知られていない「案内」が必要とされる。ベイコンは、この船出にあたって、いかに世論のはげしい攻撃、内心の躊躇と疑念、対象をとりまく雲霧のうちで、「神の加護を信じてそれにたよった」かについて語っている。<sup>21</sup>人間の認識能力の問題は、かれにおいて、このように神の問題と結びついた、人間精神と自然との関係の問題であつたのである。わたしは以下において、これまでベイコンの全著作中でもっとも認識論、方法論の書として解釈の進んでいる『ノヴム・オルガヌム』第一巻を中心にすえて、上述の視角から新しい解明を試みたいと思う。この部分はベイコンの原典中もっとも知れ渡っている部分であるから、わたしの試みの特徴もととりわけ際立させて伝えることができるであらう。

(1) 「研究(二)」参照。

(2) *Instauratio Magna*, Praefatio.

(3) SMITH, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, 1918, p. 4-5.

(4) 同じ「序言」中の次のような句を「適当なセッター」としてあげることもまたできたであらう。「そしてさらに、人間的なものが神的なものをおかさないうちに、すなわち、感覚の道を切り開き自然の光をさらに増すことによって何かわれわれの精神に神の秘義に対する疑惑や無知がおこらないように、かえってむしろ、空想と虚妄とからきよめられて、しかも神の啓示に従い、それにまったく献身する純粹な知性によって、信仰に属

するものが信仰にゆだねられるように祈る。」

(5) SORLEY, *A History of British Philosophy*, 1920, chap. II, p. 34.

(6) MORRIS, *Locke, Berkeley, Hume*, 1930, p. 10-11.

(7) ロック研究の基本文献である GIBSON, *Locke's Theory of Knowledge and its Historical Relations*, 1917 によつて、次のように明言されている。『人間悟性論』のなかには、ベイコンの著作のほんのわずかな跡形をえもなう (p. 233)。また、広く利用されている *An Essay concerning Human Understanding* by John LOCKE, Abridged and Edited by PRINGLE-PATTISON, 1924 の序論にも「ロックは、ベイコンとは違った意味に

# フランク・ハイコン研究 (三)

における哲学者であることを言えよう」とある (p. X)。

(8) MORRIS, *op. cit.*, p. 11.

(9) *Ibid.*, p. 7-8.

(10) ハイコンの古く著然たる自然科学について、FROST, *Bacon und die Naturphilosophie*, 1927 など最近のものに見られる定説である。LIEBIG のハイコン自然研究法批判 (一八六三) 以来、とりわけドイツの哲学史家が、この古い面をよく解明したようにみえる。特に「熱」に関しては、ADICKES, *Zur Lehre von der Wärme von Fr. Bacon bis Kant, Kant-Studien*, XXVII (1922), S. 328-368 に詳し。

(11) cf. WOLF, *A History of Science, Technology and Philosophy in the XVIIth and XVIIIth Centuries*, 1935, p. 199-249; LEVI, *Il pensiero di F. Bacon considerato in relazione con le filosofie della natura del Rinascimento e col razionalismo cartesiano*, 1925.

3・2 『ノヴム・オルガヌム』の第一巻は、「第二部略解」の表現をかりれば、それにつづく論述のうちに示されるべき「教示的部分」(pars informans) に対して、「準備的部分」(pars praeprans) にあたるものであるが、周知のとおり、それは全巻一三〇のアフォリズムからなりたっている。従来、その構成に関して読解上の便宜のため

に、注釈者たちによって大体の輪廓がつけられている。それらはいずれも、ハイコン自身がアフォリズムの順序づけについてみずから語っているところからみても、読者の便宜に多少とも役立つものといえるであろう。わたしは、同

(12) cf. GIBSON, *Francis Bacon, a Bibliography*, 1950.

(13) *Instauratio Magna*, Distributio Operis.

(14) 「研究 (一)」六七ページ参照。

(15) *Instauratio Magna*, Praefatio. cf. *N.O.*, I, 116.

(16) cf. *Locke's Essay*, ed. by PRINGLE-PATTISON, p. 350.

(17) 方法論上でのデカルトとの関係については、自然の「本性」への分析とそれからの逆の総合という根本的な点に關して、伝記としては SURVEN, *Les années d'apprentissage*, p. 369-71 等、また理論的には MILHAUD, *Descartes savant*, p. 213-237 等を見よ。一'の注 (12) 参照。

(18) *Ibid.*, p. X.

(19) *Instauratio Magna*, Distributio Operis, III'の注(4)参照。

(20) *Ibid.*

(21) *Instauratio Magna*, Praefatio.

じく便宜のためにであるが、いっそうテキストに即して、あらかじめ次のような簡略な表示をしておきたい。<sup>(3)</sup>

「まえおき」(Aphs. 1-37)

A. 人間の精神の浄化

(a) イドラ (Aphs. 38-70)

(b) 現行学問の虚偽の徴証 (Aphs. 71-77)

(c) 伝統学問の誤謬存続の原因 (Aphs. 78-92)

(d) 学問革新の期待の根拠 (Aphs. 93-115)

B. 人間の精神の正しい方角 (Aphs. 116-128)

C. 学問革新の目標 (Aph. 129)

「むすび」(Aph. 130)

さて、普通ペイコンのイドラ論として称揚されるものは、上記の略表中の A (a) にあたるほんの一部であり、またペイコンの独自の指導理念とされるもの、すなわちその第一の「学問の統一」は Aph. 127 に代表され、その第二の「学問の実践的目的」は Aph. 81 に代表される。そして、ソーリーなどによって集約されているように、これら指導的なものをペイコンのいっそう特殊な自然概念や帰納法から区別する——「かれ自身は区別していないが」——これによって正しい哲学史的なペイコン解釈により容易に到達し得るとされる。<sup>(4)</sup>これは、かなり広く受けいれられている割り切った解釈であり、一定の哲学史的パースペクティヴのもとでは可能な解釈でもあろう。しかし、わたしのたてた前述の視角からは、あまりにもこれは厳しく、貧しすぎるのである。

もちろん古くからこれ以外のいつそうテクストにも即した理論的解釈の試みがないわけではない。<sup>(6)</sup> さきにもかなり基本的に参照したシュールは、当時現存の哲学および諸学における教条主義と経験主義との「中間の道」を開こうとするペイコンの根本モチーフを他の小テクストを駆使して定め、そのうちにイドラ論を置いて解釈し、当時の状況下でおこり得べき反論との争点として「科学と神学」、「科学悪用の危険」、「古代人論争」に特に注意を払っている。<sup>(7)</sup> このような視点は、従来なおざりにされがちであった多くのアフォリズムのなかの二、三のものに光をあてた。しかしながら、ここでもなお科学と神学との相反関係が重視され、理性と啓示との相補関係、自然と時との問題が軽視されているうらみがある。先述のシュールによる「精神の統一性」の解釈の特異性は、ここに由来するものである。<sup>(8)</sup>

したがって、原典にたちかえらなければならない。そこでは、従来のいわゆるイドラ論も、アフォリズムの数からみて全体の四分の一にすぎないばかりか、全体の下図のうちで一定の位置を占めるものであり、また、前記のいわゆる指導的理念についても他にそれと矛盾するアフォリズムを容易に見いだすことができるのである。後に見るように、ペイコンにおける学問の実践的目的と観想的目的との矛盾は、かれにおける唯物論と宗教との関係につながる。<sup>(9)</sup> 最大の謎である。さらに、前掲略表中のA(b)(虚偽徴証論)、(c)(誤謬存続原因論)は、A(a)イドラ論と同じく、「人間の精神の浄化」の見地からのものとして一応はまとめられるにしても、それらは、人間精神の本性(natura)からの「イドラ論」に対して、占術的な徴証(signum)ならびに史学的原因(causa)からの虚偽、誤謬論であることが注意されてよい。<sup>(10)</sup> 前者の徴証論は、方法論的に、イタリアルネサンスにおけるボムボナツィ、カルダノに始まる占星術的徴証による宗教批判の、また後者の原因論は同じくマキアヴェッリの社会的原因による歴史批判の、系統に属するものと想定することができる。

それゆえ、次には、これらの問題や新しい想定のもとに、テキストの読み方、すなわち研究史との関係でいえば注釈の仕事を再検討しなければならないであろう。ところで、この分野で現在でも基本的なファウラーの注釈（一八八九年）は、上述の視角から見たベースベクティヴのうちで特に問題となるアフォリズムに関して、不思議なことに、まったく注釈を欠くか、あるいははじめだつて恣意的ないし多義的である。これは注目してよい事実であろう。わたしは、それらのうちからもっとも問題的なアフォリズムのいくつかを選び、前述のテキストの特性をふまえたうえで、それらの内容の「心髄」を明らかにしていく手法をとった。以下では、そうした問題的なアフォリズムのうちの五つを柱としてとりあげ、それらとの関連で他を説明していきたい。なお、上記の「最大の謎」にかかわるアフォリズムは便宜のため章をあらためるつもりである。

- (1) *Partis Secundae Delineatio* (vol. III, p. 552). この一六〇六—七七年に執筆された *Delineatio* 全体の要約がアボットによつて巧みになされている。cf. ABBOTT, *Francis Bacon*, p. 357-360.
- (2) 主なものは KITCHIN 版(注釈付) *Francisci Baconi Novum Organum*, Oxonii e Typographeo Academico, 1855 年、FOWLER 版(注釈付) *Bacon's Novum Organum*, Oxford at the Clarendon Press, 1878, 2nd ed. 1889 である。後者の FOWLER のものには、前者 KITCHIN の注をはじめ今日でも定本とされている七巻著作集 (London, 1857-1859) の編者 SPEDDING, ELIS の注が参照されている。その後だされている版本はすく

てこれらに拠っており、テキストに即した注解もこれら以上にでているものは皆無にひとしい。したがって、「注釈者」という場合に、ファウラーをその第一の代表者として考えるのが適切であろう。『ノヴム・オルガヌム』は、かれの整理区分によれば、大略次のように分けられる。(FOWLER, 2nd ed., p. 190 — 以下ではただ FOWLER として示す)。

- A. 当時用いられていた方法の無効、およびいつそう忠実な自然研究の必要についてのまえがき (Aphs. 1-31)
- B. 新しい方法を導入するにさいしての弁明 (Aphs. 32-37)
- C. もっとも重要ないわゆるイドラ論 (Aphs. 38-70)
- D. 先行諸哲学の欠陥と無用性の、五つの徴証 (Aphs. 71-77)

### フランシス・ベーコン研究 (三)

- E. 過去長いあいだ誤謬の存続したことの一五の原因 (Aphs. 78-92)
- F. 将来の学問の進歩を期待し得る二一の根拠 (Aphs. 92-115)
- G. 三つの注意なげし警告 (Aphs. 116-118)
- H. 三つの弁明 (Aphs. 119-121)
- I. おごり得べき四つの異論に対する回答 (Aphs. 122-126)
- J. 自然学のみならず論理学、倫理学、政治学にも同一の方法が適用されるべしとの要求についての最重要のアフオリズム (Aph. 127)
- K. 第二巻へ移るための雑注 (Aphs. 128-130)
- (3) わたしの略表に關していえば、——
- 「人間の精神」を軸にすえたわたしの表におけるA、Bの大部分を見失うと、ファウラーの「三つの弁明」(Aphs. 119-121)や「四つの異論に対する回答」(Aphs. 122-126)などが「微証」論(A(b))や「誤謬存続原因」論(A(c))などと並列的なものにばやけてしまう。それだけでなく、『学問の進歩』における人間精神の本性と諸機能に關する部分との連関が見失われる恐れがあるであらう。ファウラーの表で別格視されている Aph. 127 は、それと同様の内容がすべて Aph. 80 で述べられていたのであって、全体の区分を乱すほど特別視する理由はないように思われる。なお、わたしの略表において、Aの(b)(c)(d)がともに学問にかかわることも注意されて、二区分であらう。
- (4) SORLEY, A *History of British Philosophy*, p. 23.
- (5) 散発的であるが、たとえば次のようなものがある。L'ÉVÊQUE, François Bacon, métaphysicien, *Revue philosophique*, 1877, II, p. 113-144; WOLFF, Bacon und seine Quellen, 1910-13. 哲学史的視野の広いフロシャル、テイラーの同名の小論文(“Fr. Bacon”)は、慣わしたとらわれないゆとりを示している。
- (6) 「研究 (11)」1・1参照。cf. SCHULZ, *La pensée de Lord Bacon*, chapitre II, III, IV.
- (7) 「研究 (11)」2・3参照。
- (8) ベイコンは、浅はかな哲学の知識は無神論に導くが、その道をめぐる進めは宗教にたも帰るといつてゐる。cf. *Essays*, 16; *AL*, I, 1.3.
- (9) *N.O.*, I, 70, 78, 115.
- (10) ベイコンが CARDANO, *De varietate rerum*, 1557 を知っていたことは確実である (*N.O.*, II, 50)° cf. BUSSON, Introduction (in: POMPONAZZI, *Les causes des merveilles de la nature, ou les enchantemens*, 1930); BROCK, *Staat und Gesellschaft bei Francis Bacon*, 1937. なお「研究 (11)」2注(8)参照。

#### 四、問題的なアフォリズム

4 問題的なアフォリズムとして、わたしはまず、次の四つのものを掲げる。第一は、ベイコンがかれの『大革新』の事業にいかなる意味で困難を感じ、またいかなる意味でそれを容易と考えていたかに関するものであり、第二は、ベイコンがその時代の学問に対して裁判官として臨んだか、あるいはただ案内人の役をひきうけただけかに関するものである。これらは一見たあいしない内容に関するものと思われることであろう。これに反して、第三は、ベイコンのいう第一哲学の内容と学問におけるその位置にかかわるものであり、第四は、かれのいわゆる自然の究極的な真相とそれの認識可能性にかかわるものである。これらに対するファウラーの注釈を見ると、第四に関しては——恣意的に——ベイコンのうちに不可知論を導きいれ、第三についてはベイコンの「第一哲学」を——無理に——自然哲学と切り離している。第二はベイコンの皮肉な個性に還元して安易に注釈され、第一は注釈を欠いているに等しい。一見たあいしないものにみえる第一、第二のアフォリズムも、先述のベイコンの根本思想との関係からするならば、第三、第四におとらない思想的内容を含んでいる。事実、すぐ後に見るように、これらは、『学問の進歩』その他のテキストのなかでも繰り返し現われている、ベイコンの主要なテーマに属するものである。

テキストの基本的注釈書におけるいわば穴をあちこちに列挙してそこに柱を立てる上述のようなわたしのやり方は、整然とした理論的解釈の青写真で一挙にりっぱなベイコン論を構築することを直接の意図とはしていない。しかし、それらの穴に柱を立てることは、たんにこれまで解釈上問題であったベイコンにおける「第一哲学」や「自然」

の概念の穴をうめるだけではなしに、テキストに即してその中からベイコン解釈の今まで忘れられていたもう一つの青写真の基本的な線を浮びあがらせてくれるものと期待してよい。

4・1 (Aph. 34)「また、わたくしが提唱することを述べ伝え説明するだけでも、容易な仕事 (facilis ratio) ではない。それ自体として新しいことも、なお、古いことになぞらえて理解されるからである。」

4・1・1 この *Neque* で始まるアフォリズムは、なんの変哲もないものであり、したがって、これまであまり注釈の対象にはならなかった。それは、明らかにその直前のアフォリズム (Aph. 33) に接続している。すなわち、「(かくさずにいわねばならぬが) わたくしの道についても、その道に従って発見されるところのものについても、予断 (すなわち、現在行なわれている仕事) によっては何一つ正しく判決されることができない。というのは、それ自身が裁判にかけられているところのものの下す判決に服することを要求されてはならないからである。」<sup>(1)</sup> をうけて *Neque* と続いているのである。それ自身裁判の權威を問題にしているところのものはその当の裁判の諸規則による判決に服するべきではないのと同じように、それ自身が新しいものは古いものとの類比において理解されるべきではない。このような考え方をうけて、現行の学問の仕事とは異なる新しい内容は、その伝達に関しても、従来の学問のしかたで理解するわけにいかず、それゆえきわめて困難であるということが語られているように解される。

ところで、問題は次にある。すなわち、ベイコンは他方で「わたくしの仕事は、実行するのは困難であるけれども、叙述するのは容易である」<sup>(2)</sup> と述べているのである。これだけならば、あるいは細かい穿鑿と思われるかも知れない。しかし、前記のように、現行の学問の權威それ自身を裁判にかけてその下す判決に服する必要なしと申し立てるベイコンは、他方でまた、「わたくしは裁判官の役ではなしに案内人の役をひきうける」<sup>(3)</sup> ともいうのである。したがっ

て、前掲のアフォリズムは、次に第二に掲げるアフォリズムのふくむ問題と直接つながっている。すなわち、ベイコンは、時代に対してただの案内人の役をつとめようとしたのであろうか、それとも当時の現行諸学に対して裁判官として臨もうとしたのであろうか。通俗の解釈者によれば、ベイコンはときには皮肉に「案内人」を自称しているけれども、実は——「かくさずにいわねばならぬ」(dicendum enim est aperte)とすれば——時代に対して「裁判官」として臨んだ、と解釈されている。このような解釈の傾向は、次節で見られるように、同時代に支配的であった諸学に対するベイコンの妥協的な言辞の解釈において、ますますはつきり現われてくる。かれがその提唱にかかる学問の革新およびその方法の伝達(叙述、説明)を容易と考えていたか困難と考えていたかという一見簡単に見える問題は、このようにして、意外にも伝統哲学に対するベイコンの根本態度にかかわっていることがわかるであらう。

4・1・2 さて、ベイコンは、あの有名なイドラ論を展開するに先だって、「だがしかし、たしかに、述べ伝える一つの簡単なしかたが残っている。人びとを個別的なもの自体およびそれらの系列と順序に導き、かれら自身の方もしばらく概念を捨てるようにして事物自体と親しくし始めることである」といっている。また、イドラ論を展開し終わったあとでも、「この解明は、妨害さえとり除けば、精神の真の自然な仕事なのである……」<sup>(3)</sup>といっている。さらに詳しい表現をかりるならば、「実に、解明は、妨害から解放された知能(understanding)の、まさに自然的、直接的な志向、実現、前進である」<sup>(4)</sup>。ここにいう「妨害から解放された知能」、あるいは「精神の真の自然な仕事」を行なう「精神の個有の本来の力」(vis propria et genuina mens)<sup>(5)</sup>こそ、「一般の用語で、人間精神の「自然の光」と言い表わされるところのものにほかならない。つまり、「自然の光」にとっては、新しい学問の叙述も容易であると考えられたのである。

しかしながら他方、「精神の個有の本来の力」「自然の光」は、イドラ排除による人間精神の浄化をとおしてはじめて獲得されるものであった。しかも、このような人間精神の浄化は、かれによれば、「時の娘」としてしか現われ得ないものである。<sup>(8)</sup>ここには、ペイコンにおいて学問の真理が「自然の光」にもとづくとともに、「時の娘」としてしか現実的なものにならないという二重の性格をもつものであることが覗われるのである。ペイコンは、かれの提唱する「解明」を、「自然の光」にとつてはもととも容易なものだが、「時の娘」としては実現の困難さを伴うとしていた、と解釈される。

4・1・3 上述のようないわば真理の自然的性格と歴史的性格との二重性とでもいえるテーマを「容易さ」と「困難さ」という比較的簡単なことばの二重性で言い表わすことは、実にペイコンにおいては、歴史上のいわゆる難事業がそのうちに含んでいる容易さの契機を洞察することと結びついていた。かれは、自分の学問上の事業について、しばしばそれを「知力よりもむしろ時が生み出したもの」と述べているが、一般に時に促される歴史的な事業というものは、その手がかりを着想することは、たしかに一つの「驚異」であるとしても、その他は「案々とつづいて行なわれる」ものだ、と語っている。<sup>(9)</sup>これは、かれが好んで引用するあのアレクサンドロス大王の偉業について、かつて史家リウィウスが「アレクサンドロスはくだらぬ懸念をあえて無視しただけだ」といった故事から学んだものなのである。すなわち、アレクサンドロスのアジア遠征について、かつてアイスキネスはそれを「奇跡」でもあるかのよう(10)に語ったが、後にリウィウスは事態をいっそうよく観察して「ただかれはあえて正当に妄想を軽蔑しただけだ」と洞察したのであった。ペイコンは自分の思想上の仕事についてもつねに、「大事業と考えられていたものを大事業でないようにしただけ」の歴史的事業であると考えている。しかも、大事業であるかのような妄想をうち破るもの、そ

れが時なのであった。すなわち、「ただ人間の行なう仕事や行為にだけでなく、その考える思想にも機運(casus)がはたらいているのである」<sup>11)</sup>。

このような目で見てくると、バイコンのテキストの中から、今まで見すごされていた一つの基本的な矛盾点が浮びあがってくる。それは、バイコンが上述のように学問の真理を「時の娘」としながらも、また他方ではそれを偶然的な「機運」にはなしに永遠の「自然の光」に求めていることである。すなわち、かれは、学問における古代偏重を批判して、「事物の発見は自然の光から求められるべきで、古代の暗黒からとりかえされるべきではない」といい、「真理はある特定の時代のふたしかな幸運(felicitas)に求められるべきではなく、永遠である自然と経験との光に求められるべきである」と述べている。<sup>12)</sup> 永遠な「自然の光」から生まれながら「時の娘」でもある、真理のこのような矛盾した性格は、いかなるものなのであるうか。勝手な理論で割り切った答えを出すことは、なおさし控えた方がよい。

(1) cf. *Instauratio Magna*, Praefatio. 以下、バイコンの大

法官としての経験と現行法に対するかれの見地が、思いおこされる。「研究(一)」一・三、注(7)参照。

(2) *N.O.*, Praefatio.

(3) *N.O.*, I, 32. cf. *N.O.*, Praefatio; I, 61, 122.

(4) *N.O.*, I, 36.

(5) *N.O.*, I, 130.

(6) *Valerius Terminus*, ch. 22.

(7) *N.O.*, I, 130, 56, 122; *Instauratio Magna*, Praefatio.

Distributio Operis.

(8) *N.O.*, I, 84, 116, 121, 122; *Instauratio Magna*, Epistle Dedicatory.

(9) *Instauratio Magna*, Epistle Dedicatory; *N.O.*, Praefatio; I, 78, 122. 「研究(一)」七〇ページ「研究(二)」一〇ページ参照。

(10) *A.L.*, I, 5, 2. cf. *N.O.*, I, 97, 110. なおリウィウスからの引用句は、cf. *Ab urbe condita libri*, IX, 17.

(11) *N.O.*, I, 122. cf. *Instauratio Magna*, Epistle Dedicatory

(12) N.O., I, 122, 56.

4・2 (Aph. 128)

「しかしながら、わたくしについて、次のような嫌疑をかけることは許されない。すなわち、わたくしが現行の哲学および諸技術、諸学を破壊し廃止しようと欲しているのではないか、という嫌疑である。というのは、それどころかわたくしは、それらの学術が行なわれ育成され尊重されることを心から喜ぶものだからである。事実、わたくしは、これまで支配的であったそれらのものが論争の種をまき、談論を飾り、教職の義務のため社会生活の便宜のために運用され役だつことを、けつして妨げようとは思わないのである……」<sup>(1)</sup>

4・2・1

普通の解釈によれば、当時現行の学術に対する、革新者ペイコンのこのような妥協的言辞は、たんなる「皮肉」であつて、かれの真意は、明らかに、それら支配的学術の虚偽と不正とに対する敵対的な批判にあつた、というのである。<sup>(2)</sup>これと同様の他の妥協的アフォリズムもすべて同じしかたで解釈される。すなわちたとえば、「臆見と世論にもとづいて諸学においては、予断と論理 (dialectica) を用いることが有用である。同意を獲得すればよいのであつて、事物を支配するには及ばないのであるから。」は、とりわけ倫理学と政治学におけるスコラ論議に対する「皮肉」として解釈され、また、「……投票の権利が存するところの、神事と政治においては別である〔すなわち、一般の意見の一致から得られるところのものが正しい——引用者注〕……」は、多数決制による国会および教会会議に対する「皮肉」として解釈される。<sup>(4)</sup>このような解釈にたつならば、皮肉な言辞のかげにあるペイコンの真相は、その時代の学問に対する「裁判官」以外のなにものでもなく、たんなる「案内人」などではあり得なくなるのは当然であろう。<sup>(5)</sup>

4・2・2

ところが、もともと、ここで問題にしているアフォリズム (Aph. 128) そのもののうちでペイコンは、

伝統的方法によつては學問の大きな進歩が保証されたいことを、別に皮肉の調子ではなしに、公然と表明してゐるのである。すなわち、「だがしかし、繰り返しはつきり警告するが、現行のやり方によつては、諸學の學說と考察において大きな進歩がなされることも、また諸學が偉大な成果をあげるようにされることも、あり得ないのである。」このような公然とした判断の表明と直接つながる文章は、修辭學上からみても、「皮肉」とはうけとりにくいのである。たしかに、ホラティウス『風刺詩』の一句を思い出しながら、現行の諸學に対して、そこで用いられている「予断は人びとの同意を得るだけの力を十分にもつてゐる。事実、人びとが同じ仕方で一様に気が狂つてゐる場合にも、かれらは互いによく意見が一致し得るのだから。」と喝破するペイコンの文章は、概して鋭い風刺に富む。しかし、一体に皮肉の調子を帯びてはいないのである。問題のアフォリズムにおいても、かれ自身きわめて卒直に、現行諸學に対して自分の抱く愛好 (affectus) と善意 (bona voluntas) がいかに眞実のものであるかについて、特に『學問の進歩』を見てほしいと語つてゐるほどである。

ペイコンは皮肉 (ironia) のレトリック、あるいは反語のロジックを知らなかつたわけではない。かれはある個所で、高慢なヒッピアスと美について對話するソクラテスの話法ないし論法の例をひいてゐる。しかし、そのような場合にも、皮肉ないし反語の眞意を隠さずに逸らさずにすぐ説明してしまふのである。それに反して、かれはまじめな風刺 (satira) は「事物の内的本性」を表わすものであるとして、しばしばこれを好んで用いてゐる。また、周知のように、当時ヨーロッパルネサンスの時期には懷疑派的傾向の文人たちによつて自他の説にとらわれない無知の留保の表現法として皮肉が愛用されていたが、恐らくこれらの人びとを念頭において、ペイコンは、「かれらは……論議の渦巻きに振りまわされ、問求の自由を濫用して探究の嚴密さを弱めた」と批評してゐるのである。ペイコンがまた

他方で過去のすべてを清算し破棄してすべてを新規に始めねばならぬとしたイタリア・ルネサンスの哲学者たちの「大騒ぎ」に対しても批判的であったことは、前に述べたとおりである。さらになお、おくれた時代に先進的な哲学に対して国王ならびに当時の有識者の援助を得るという著書目的から——あの「デカルト仮面」説のように——妥協的な皮肉の表現がとられたのだという解釈が、成り立つかも知れない。しかし、『大革新』に付された「国王への献辞」は、それを一読するならば、はるかに直截な文体のものであることは明らかである。

4・2・3 さて、問題のアフォーリズム (Aph. 128) が従来普通解釈されてきたように「皮肉」の表現でないと思えば、それは一体何を意味するのであろうか。それは、主体的にひきうける役割としては (ad personas)、「裁判官」にたとえられる学派創始者ではなしに時代に促される人間知識の進路の「案内人」の役割を、たずさわる事柄そのものとしては (ad res ipas) 、現行法の原理と判決規則にたとえられる既存学問の原理と論証方法の枠内での学説の権威の確立ではなしに自然の光に照らされた自然自体の権威の発見を、きわめて卒直に、なんの「皮肉」もまじえずに、区別し表明しているものと理解される。<sup>15)</sup> ペイコンの仕事は、当時支配的であったスコラの諸学の創始者であるアリストテレスの学説の権威と争って、もう一つ別の権威ある学説の創始者たる名誉をかちえることではなくて、およそ学問における権威を権威たらしめるもの、すなわち自然自体と、また創始者を創りだすもの、すなわち時とに、あくまでも忠実であろうとすることであった。<sup>13)</sup> 認識の客体に関して諸学説の権威をこえたところに自然自体がおかれたとすれば、認識の主体に関して諸学派の創始者をこえたところに歴史が認められたのである。これがやがて伝来の諸学派、諸学説に対する厳しい反論へと導いたとしても、それがかれ個人の力量によるものであるとは、かれ自身考えなかった。また、いっさいの学派創始者の名誉を自己に許さなかったし、学説の権威を認めなかった。なお、このような考

え方は、先述のペイコンの根本思想にもとづくものである。<sup>10)</sup>

要するに、ペイコンは、古人の知力そのものの卓越性とそれが編みだした論理、見いだした発明の成果を卒直に認める。しかも、それとともに、時代の要求する「自然の微妙さ」の認識に当面して、それらが「時の下す判決」<sup>11)</sup>の前に立たされていることをも直截に洞察するのである。あるいは、かれは同時代の諸学説、諸学派を時の法廷の前に導く案内人であつた、と言い表わせるかも知れない。

- (1) cf. *N.O.*, Praefatio.
- (2) cf. *FOWLER*, p. 334.
- (3) *N.O.*, I, 29; *FOWLER*, p. 208, 332.
- (4) *N.O.*, I, 77; *FOWLER*, p. 271.
- (5) ファウラーは、本文中さきに引照した *Aph.* 32 への注のなかで、「たしかに、この叙述は、ペイコンがその先行者や同時代人の多数者、特にアリストテレスやアリストテレス派に対して下すことになる判断の厳しさと、まったく一致しないものである」と批評している。 *FOWLER*, p. 209.
- (6) *HORATIUS, Satirae*, II, 3. 40.
- (7) *N.O.*, I, 27.
- (8) *A.L.*, II, 1. 5. cf. *A.L.*, II, 1. 4; *N.O.*, I, 120. なお、ソクラテスの例については *PLATON, Hippicus Major*, III, 291 参照。「美」を知るために、美しい乙女とならべて美しい馬や美しいつばを列挙したソクラテスに対して、「そのようなやしく汚らしい例」と憤慨したヒッピアスにソクラテスは次のように答える。「君のいうことはもつともだ。君のようにみなのきれいな者の、いかにもいいそうなことだ。」
- (9) cf. *D.A.*, VII, 2. そこで風刺の例とされている「無学者は、まず、自分の思っていることを話してもらわねば、学問のいうことを受けいれない」(*Prov.* XVIII, 2) は *Instauratio Magna*, Distributio Operis の冒頭の部分で用いられている。
- (10) *Instauratio Magna*, Praefatio.
- (11) 「研究(一)」一・三参照。なお、ペイコンの「献辞」に対するシェームズ一世の返書 (*vol.* VII, p. 122) 参照。
- (12) 'ad personas', 'ad res ipsas' の対称については cf. *N.O.*, Praefatio.
- (13) 「偉大な創始者たちがかれらの当然うけるべき尊敬をうけるのはよいが、創始者たちの創始者である時が、その当然の権利すなわちさらに進んで真理を見いだしていく権利を奪われな

いようにしなければならぬ」(AL, I, 4, 12)。「創始者たちに限りない信頼をよせながら、創始者たちの創始者、いなむしろすべての權威の創始者である時にその權利を認めないのは、このうえない精神の虚弱の証拠である」(NO, I, 84)。

(14) 「研究 (二)」 2・2・1～2 参照。なお、さきに伝記中

で言及したあの収賄事件に関して、時代に裁かれる裁判官の苦い体験のなかでペイコンの告白しているものも、また時への忠実さである。「研究 (二)」 1・4 参照。

(15) *Instauratio Magna. Praefatio*. そこでは、「時を経て固まる同意」と「時の下す判決」とが区別されている。

4・3 (Aph. 79) 「……しかしそれにもかかわらず、これ〔自然哲学 (naturalis philosophia) のこと——引用者注〕こそは、諸学の偉大な母 (magna scientiarum mater) と考えられなければならない。というのは、すべての技術と学問は、この根幹からひき裂かれるなら、磨きをかけられ実用に供されるかも知れないが、ほとんど成長しないからである……」。

4・3・1 『ノヴム・オルガヌム』のなかで述べられている、このような「諸学の偉大な母」としての「自然哲学」に関して、従来しばしば次のような解釈が行なわれてきた。すなわち、このような自然哲学の把握は他の個所 (D.4, III, 1) でのペイコンの考えと一致しないものであって、ここで「自然哲学」という用語——元来、神、人間と区別された自然の学を意味する——の使用は不適切であり、むしろ「第一哲学」(philosophia prima) と呼ばれるべきものである。また、上掲の同じアフォリズムのなかで「それ〔自然哲学——引用者注〕は、運動、光線、音響、物体の組織と構成、感情 (affectus)、知性的理解 (prehensio intellectualis) の正しい考察をもとにして、それら〔個々の諸学——引用者注〕に新しい力と成長を与えることができたであろう」と述べられているが、感情と知性的理解の考察を「自然哲学」に含ませることは、これも、ペイコン自身のよそでの規定と一致しない。要するに、ここでの「自然哲学」は実は第一哲学のことであって、これら両者を、「ペイコンは混同したと結論せざるを得ない」、<sup>1)</sup> というので

ある。<sup>(2)</sup> ほぼ以上のような解釈の基礎には、たとえば医学が生理学の根底なしには経験的医術に墮するのと同じ関係があらゆる諸学にわたって等しくあり、諸学よりもいっそう包括的なしかたで自然および人間を取り扱い、そしてすべての特殊学がそれに連結されるべきであるような、そうした普遍学が第一哲学として考えられるべきだという理解があるように思われる。

4・3・2 たしかに、ベイコンは、かれの方法（帰納法）が——古来の学の区分にしたがって——ただ自然学にだけ適用され得るものであって、倫理学、政治学には適用され得ないのではないかという疑問に答えて、その方法が、「三段論法によって事処理する普通の論理学（vulgaris logica）と同じように」すべての諸学に及ぶといっており、<sup>(3)</sup> また、そのさい、かれの論理学を普通の論理学から区別する点である、解明の術（doctrina interpretationis）における種々の研究対象に應ずる発見の方法（modus inveniendi）の差異づけも、かならずしも諸学のうちで特に自然哲学に根幹の位置を与えるものとはされていないのである。<sup>(4)</sup>

しかしながら、もともと前掲のテキストは、その他の諸学に対する「自然哲学」が過去に軽んぜられてきたことが学問発達の渋滞の歴史的、原因であると主張されているコンテキストのなかで述べられているものである。すなわち、古代ギリシアの自然学の短い時期をのぞけば、ギリシア人とローマ人とは道德哲学（moralis philosophia）や政治に努力を傾注し、西ヨーロッパ人の時代には秀れた人びとはほとんど神学に専念したのであり、そのため本来「諸学の偉大な母」であるべき自然哲学は、結局、他の諸学への「通路や橋のようなもの」になりさがってしまった。論理学、道德哲学、政治哲学をはじめ医学、天文学、光学、音楽、機械的技術に対して、自然哲学が本来の位置にもどされないかぎり、学問の大きな進歩は期待できないというのである。したがって、ここで「自然哲学」とは、まさに自然哲

学以外の何ものでもないものであって、それと区別された第一哲学を意味するために誤って使われた用語であるとはとうてい解しにくいのである。コンテキストからまったく無理である。むしろ、上述のような歴史的考察から、史上の自然哲学に「諸学の偉大な母」という第一哲学的な地位が与えられているところに、問題のアフォリズムの真の意義が存するように思われる。このような意味で、ペイコンのいうように、個々の諸学は自然哲学と切り離されるならば、「ほとんどまったく深み (profundum) を欠いて、ただ事物の表面と多様性の上をすべるにすぎないのである」<sup>(10)</sup>。他の諸学に対して自然哲学が「深み」を与えるという考えは、『隨筆集』初版以来一貫しているところであり、ペイコンがそこまでつき進むことを断えず要求している、あの「微にして細なる」(subtilis)「自然の内部に奥ふかくあるもの」つまり「自然の前庭」ではなくてその「奥室」(interiora)こそ学問一般にとってもっとも基礎的なものと考えられたのである。

4・3・3 さて、しかし、問題は他の個所における規定との撞着にあった。ファウラーは、他の主要な個所として、学問の分類について論述した『学問の尊厳と進歩』のなかで、「その他の諸学の母」(mater reliquarum)が自然哲学にはなしに「普遍学」(Scientia Universalis)について言われている個所<sup>(11)</sup>をあげている。同様の用語法は『学問の進歩』にも見いだされるし、また『ノヴム・オルガヌム』自身のうちにさえも覗うことができるであろう。したがって、こうした個所についても検討しておかねばならない。

ペイコンによれば、「あらゆる事物には三重の刻印、すなわち神の力、自然の差別、人間の利用の印がおされ、つけられている」<sup>(12)</sup>。そのいづれに向けられるかに応じて、同じ人間理性による研究も、神学 (divine philosophy)、自然哲学 (natural philosophy)、人間哲学 (human philosophy) に分かれる<sup>(13)</sup>。「しかし、知識の配分と区分は、一つの角を

なして交わり、このように一点だけで接するところの別々の線のようなものではなくて、不連続になつて大枝や元枝に分かれるまではある程度と量の一体 (entireness) をなし連続 (continuance) している幹で合するところの、木の枝のようなものである。<sup>(11)</sup> この根幹部分こそ、かれのいう一つの「普通学」「本源的ないし普遍的な哲学」にほかならないものであり、従来のいわゆる第一哲学 (philosophia prima) の名に値するものである。それは、平易に消極的に言うならば、「哲学や科学の特殊な部門のどの範囲にも入らない、もっと共通で高い段階の、有益な所見や一般命題を入れる容器」<sup>(12)</sup> と言ひ表わし得るものであり、「個々の学問に対して不偏で無差別な共通の原理および一般命題」<sup>(13)</sup> を取り扱う学である。

バイコンがこのような「第一哲学」の名にふさわしい普通学を要求するのは、個別の技術や学問への配分、専門化が行なわれたのち人びとが根源的な普遍性を顧みなくなっているからであつた。「平地や水平面の上では完全な発見を行なうことはできない」。<sup>(14)</sup> 「いっそう高い学問」 (a higher science) へ登らなければならぬ。専門化するなわち「知識の区分は、すべて、切斷や分離としてよりも、むしろ筋や脈として理解せねばならず、知識の連続性 (continuance) と一体性 (entireness) とを保持しなければならぬ」。<sup>(15)</sup> 枝葉である個々の学問は、知識の元の根幹である普通学から切り離されるならば、もはや実を結ばないのである。これを別の面からいえば、大きな部屋を明るくするためには常夜燈の小さなろうそくを四隅に持つてまわるよりも大きな吊燭台に火をつける方がよいと同じように、人間精神の小部屋の一つずつの中で細かい区別立てをするよりも全体をひとしく照らす光をつける方がよいのである。<sup>(16)</sup>

4・3・4 それでは、いわゆる学の分類において、「第一哲学」の名にふさわしい普通学は内容上自然哲学と一致するのであろうか。それは、古来「第一哲学」と呼びならわされてきた形而上学といかに異なるのであろうか。ま

### フランス・ペイコン研究(三)

た、ペイコン自身のいうところの形而上学といかなる関係にあるのであろうか。ペイコンが「形而上学という語を普通の受けとり方とはちがった意味で用い」、自然に関する学の一部門に割り当てたことは、かれの学問分類表によって広く知られているところであらう。<sup>(17)</sup>ところで、これは古来の形而上学に対する批判にもとづいているように思われる。すなわち、アリストテレス以来のいわゆる形而上学は、かれによれば、「自然神学と、論理学のさまざまな部分と、自然哲学のうち原理を扱う部分と、また自然哲学のうちで魂あるいは霊を扱う部分との、一種の混ぜ物 (mixture) <sup>(18)</sup>」であって、第一哲学の名を僭称して諸学の領域を荒らしてきたものである。ペイコンは、この「一種の混ぜ物」を分解し整理して、「神の創造物の観想によって得られる神に関する知識」を自然神学とし、自然の原因についての理論的知識のうち形相因と目的因をとり扱う部門を形而上学と名づける。<sup>(19)</sup>この形而上学は、「自然の最高の法則」(the summary law of nature) つまり「因果的必然」(consequence) および自然の「意図」(intention) を探究する、自然哲学中の「頂点に近い段階」(the stage next the vertical point) であって、「数は少ないがそれらのもろもろの程度と整合とが多様性を生みだすところの、諸事物の単純形相ないし種差」を考察する、多様性からもっとも遠ざかった知識である。<sup>(20)</sup>次に、このような自然の深い研究にもとづいて「初めから終りまで神のなされる業」の栄光をたたえるのが神学であり、また他方、人間哲学についていえば、それは、「人間の志向においては自然哲学の端であり限界であるが、それにもかかわらず、自然の大陸においては自然哲学の一部分にすぎない」のである。<sup>(21)</sup>ペイコンの形而上学が上述のようなものであるとするならば、そこにはすでに、神学、自然哲学、人間哲学の三部門が共に「自然の大陸」を基盤とし自然哲学を基幹とし、かつ形而上学の「頂点」の方向において、統合されていることが見られるであらう。これを表わすためにペイコンは、あのストア派の「神および人間の事柄の学」(divinarum humanarumque rerum

scientia) という規定を援用している。<sup>(22)</sup>

しかし、自然哲学の一部門である形而上学は、なお普遍学であるのではない。普遍学に属すべき普遍的原理は、上述の形而上学的法則以上のものであり、また、「実体の相対的で付加的な性質の作用に関する研究」すなわち「事物の外的な性質」(量、類似、差異、可能性等々)の研究が普遍学の仕事に属する。<sup>(23)</sup>このように、ペイコンにおいて、普遍学は、伝統的な形而上学からだけでなくかれ自身の形而上学からも、きっぱりと区別されるのである。しかしながら、普遍学は、自然の形而上学を超えることによって、かえってすぐれた意味での自然と結びつく。すなわち、かれによれば、普遍学の諸原理の指し示す普遍的なものも、その扱う「共通の諸属性の本性と作用」も、それらはすべて、自然界において「自然が個々の対象あるいは物質の上を踏み、あるいは押しつけて残した、同一の足跡である」。<sup>(24)</sup>このようにして、ペイコンの「第一哲学」である普遍学は、前述の諸学の基幹である自然哲学をいっそう根本の方へたどったところに求められているといつてよいであらう。

4・3・5 さきに述べたように、<sup>(25)</sup>シュールは、ペイコンの「第一哲学」について、その内容がはなはだ問題적であり、ある場合にはそれが「自然学と形而上学」を意味し他の場合には「諸学に共通の公理」を意味して不安定であることを指摘している。すなわち、かれによれば、「ペイコンはアリストテレスの第一哲学の概念をきっぱり退けているにしても、どんな対象をその学科に所属させるべきかについては、ためらっているように見える。『ノヴム・オルガヌム』においては、それが自然学および形而上学自身であるかのようにであり、『学問の尊厳と進歩』においては、それらとはっきり区別して、さまざまな諸学に共通の諸公理および存在の先験的な諸条件の研究をあてがっているかのようなものである」。<sup>(26)</sup>たしかにペイコンがいわゆる学問の分類において普遍学の原理として示している例を見ると、「同一

の第三者に一致するものは、また互いに一致する」とか「等しくないものに等しいものを加えると、その総和は等しくない」とかいうようなユークリッドの公理か、あるいは自然の「量」の恒久性を表わした「すべてのものは変わるが、何ものも滅びない」といったような命題である。<sup>(27)</sup>しかしながら、前述したように、これらはベイコンにおいては、シュールのいうような「存在の先験的な諸条件」と考えられたのではなく、自然の足跡なのであった。

4・3・6 さらにいえば、『学問の進歩』で行なわれている既存諸学の補足および再分類と、『ノヴム・オルガヌム』で展開されている既存方法の批判および新方法の提唱とは、もともと別の意図から発するものであった。ベイコン自身、「どの土地が開墾されていないかを明らかにすること、開墾されている土地の誤った耕作を正すことは、別のことである」とはっきり区別している。<sup>(28)</sup>以上のように見えてくると、『ノヴム・オルガヌム』のうちに、古来の哲学の歴史的考察にもとづいて自然哲学が「諸学の偉大な母」とされていることは、かえって、ベイコンによって普遍学がイオニア自然学の系譜において考えられていることを示唆しているように思われるのである。<sup>(29)</sup>

(1) ここで掲げた Aph. 79 のほかに、*N.O.*, I, 80, 107 をもあげることができる。

(2) FOWLER, p. 274, cf. *Ibid.*, p. 311.

(3) *N.O.*, I, 127. そこでは「わたしは、怒りや恐れや恥じらいなどのようなものについても、また社会生活の実例についても、自然誌 (*historia*) と発見表 (*tabula inventiendi*) を用意するのであり、また、寒と暑、光、生長などにおとずす記憶、結合と分離 (*compositio et divisio*)、判断その他の精神の活動についてもそうする」と述べられている。ちなみに、引用文中

の「結合と分離」をエリスは「総合と分析」の意に解し、フアラは「肯定と否定」の意に解している。

なお、ベイコンが帰納法の適用範囲として今日のいわゆる人文・社会科学さらに論理学を考えていたことについては、他にも多くの典拠がある。cf. *N.O.*, II, 26, 27, 35; *Historia Vitae et Mortis* (vol. II, p. 170-174); *Filium Labyrinthi* (vol. III, p. 639-640); *Sylva Sylvarum*, Exp. 795.

(4) *N.O.*, I, 127.

(5) *N.O.*, I, 80.

- (6) *D.A.*, III, 1.  
 (7) cf. *A.L.*, II, vi. 1, VII. 3. “a common parent” “a parent or common ancestor” などといわれている。  
 (8) cf. *N.O.*, I, 127.  
 (9) *A.L.*, II, 5. 2. cf. *D.A.*, III, 1.  
 (10) ゼイエコンの用語では普通 divinity (神学) は啓示神学を意味して自然神学——その対象が神、その源泉が自然であるところの学問——から区別される。これに反して、humanity (人文学) は人間哲学と同義に使われる。  
 (11) *A.L.*, II, 5. 2.  
 (12) *Ibid.*  
 (13) *A.L.*, II, 7. 3.  
 (14) *A.L.*, I, 5. 5.  
 (15) *A.L.*, II, 9. 1. cf. *D.A.*, IV, 1.  
 (16) *A.L.*, I, 4. 6. cf. *D.A.*, I (vol. I, p. 454), II, 1 (vol. I, p. 495).  
 (17) *A.L.*, I, 7. 2.  
 (18) *A.L.*, I, 5. 2.  
 (19) *A.L.*, II, 6. 1; II, 7. 3~5.

- (20) *A.L.*, II, 7. 6~7.  
 (21) *A.L.*, II, 9. 1.  
 (22) *A.L.*, II, 7. 6. cf. *D.A.*, III, 1 (vol. I, p. 546).  
 (23) *A.L.*, II, 5. 2~3, II, 7. 3.  
 (24) *A.L.*, II, 5. 3. ゼイエコンはここで神即自然の考え方に近いといっている。  
 (25) 「研究(二)」I・I参照。  
 (26) SCHUHL, *La pensée de Lord Bacon*, p. 37.  
 (27) cf. *A.L.*, II, 5. 3. “Quæ in eodem tertio conveniunt, et inter se conveniunt” (EUCLID, *Elementa*, I, Axiom 1); “Si inæqualibus æqualia addas, omnia erunt inæqualia”, (EUCLID, *Elementa*, I, Axiom 4); “Omnia mutantur, nil interit” (OVIDIUS, *Metamorphoses*, XV, 165).  
 (28) *A.L.*, II. To the King, 15.  
 (29) ロベートソンの自然主義的ゼイエコン解釈にもとづいてマクレーも同様に科学統一思想におけるゼイエコンの自然哲学を重視している。しかし、ゼイエコンの歴史的考察には無関心のようである。cf. MCRAE, *The Problem of the Unity of the Sciences: Bacon to Kant*, II.

4・4 (Aph. 4) 「仕事として (Ad opera) 人間のなし得るのは、ただ自然的物体を結びつけ (admoveat) たりひき離し (amoveat) たりすることだけであって、他のことは自然が内部で (intus) やってしる (transigit) のである。」

4・4・1 『ノヴァム・オルガヌム』の冒頭第四のこのアフォリズムは、アイコン哲学の基礎的問題にかかわるものでありながら、おそらくまた、もつとも不確定なものの一つであるように思われる。これについてファウラーは簡単に、「われわれには、創造することは、なし得ない。なし得るのは、ただ、既にある物体を結合したり分離したりすることだけである」と注釈している。<sup>1)</sup>ところで、このアフォリズムは、このように、神の、あるいは「自然」の創造の仕事に対して人間の力に可能な範囲を限界づけているものなのであろうか。また、そうであるとしても、人間の特に知能の力の限界を示しているのであろうか、それとも人間の技能の力の限界を示しているものであろうか。

4・4・2 この謎めいたアフォリズムの意義を明らかにするためには、あらかじめ、物体を「結びつけ」、「ひき離す」ということ、また、自然が物体の「内部で」人力の及び得ないことを実現するということの意味をはっきりさせておかねばならないであらう。

まず、アイコンによれば、生物であれ無生物であれ、あらゆる物体の内奥には質料的な「霊の作用」あるいは「欲求」がかくされており、これこそ真に自然的な種類の運動 (*physica genera motuum*) であった。<sup>2)</sup>そして、こうした作用をあらわす質料の微細な構成とその構成の変化(すなわち、微分子の移動)、さらにいわゆる「純粹作用」とその法則こそがまさしく考察されるべきものであり、これらは人間の理解力の範囲にはいる事柄である。<sup>3)</sup>前掲のアフォリズムのなかで「自然が内部でやっていく」といわれているところのものは、思うに、このような運動のことにほかならない。つぎに、アイコンによれば、いわゆる機械的技術によって普通行なわれている仕事は、主として合成 (*compositio*) と分離 (*separatio*) とであるが、しかしながら前記の物体の真に自然的な種類の運動を認識しこれを実施にうつすことができるならば、人力に可能な仕事はただ合成、分離だけであって混合 (*mistio*) は自然のみのよくなし

得る仕事であると考える必要はない。<sup>(1)</sup> すなわち、「人間は技術によって自然的物体のなんらかの生成 (generatio) と変化 (transformatio) とをなし得ると期待して」よいのである。<sup>(2)</sup> 思うに、ここにいる合成と分離こそ、前記の「結びついたりひき離したりすること」の意味にはかならない。したがって、以上をまとめれば、人間の知り得、かつなし得る仕事は、自然的物体を「結びつけ」たり「ひき離し」たりすることだけではないし、また、その他物体の「内部で」おこることを自然のみがなし得るわけでもない、ということになる。

さて、前掲のアフォリズムはなおかつ、ファウラーのいうように、人間の力は神のように自然的物体を創造し得ないということなのであろうか。合成と分離以外の物体内部の自然の作用は人間に知り得ても、なおかつ神の創造の力は不可知で模倣し得るものではない、ということなのであろうか。このような解釈は、あまりにも婉曲すぎるばかりではなく、無理がすぎるように思われるのである。かつてガレノスは、その著作のなかで、自然の内的な形成力を技術の外的な作用に対置させたといわれる。<sup>(3)</sup> 前掲のアフォリズムは、ベイコンがこのような前例を念頭において、ただ現状において人間のなし得ていること、なし得ていないことを確認しているだけであるように解釈されるのである。そして、こうした確認にもとづいて、人間にはこれまで機械的な合成と分離以上には自然の原因が知られておらず、また、それをすすんで知るためにはこれまでに試みられなかった方法によらざるを得ないことを洞察しているように解釈される。<sup>(4)</sup>

4・4・3 このように見てくると、問題のアフォリズムは、ファウラーのいうような神の創造力に対する人間の知力の恒久的な限界づけを意味するものではなくて、むしろベイコンの自然概念におけるメカニズムとダイナミズムとの問題にふかく関係していることがわかる。それは、ベイコン哲学に関して従来論じられてきた、あの「形相」概

念の内容にかかわるものである。<sup>(9)</sup>さらに、それが一七世紀のいわゆるメカニスティックな自然概念の成立に関する史的問題の一つでもあることは、デカルトの次の一句をあげるだけで充分であろう。すなわち、デカルトはその『規則論』において、「われわれはこれら單純本性およびそれら相互の混合(mixtura)あるいは複合(compositio)のほかには何ものをも理解し得ない」といつているが、この表現にはペイコンの強いなごりが見られ、そこにいう「混合」と「複合」との意味を決定することは一つの大きな「謎解き」であるとされている。<sup>(10)</sup>この点について、ペイコンのテキストのうちに見られるかぎりで内容を整理し以下に説明を加わえておこう。

ペイコンは「自然の形相」をいいかえて、また「真なる種差、あるいは能産的自然(natura naturans)」、あるいは流出の源泉(fons emanationis)」<sup>(11)</sup>といい、自然の本質ないし原因をさしている。この「形相」は、ことばの構成要素である語になぞらえて自然のアルファベットとされる、あの「單純本性」と関係させて定義される。<sup>(12)</sup>すなわち、「ある与えられた物体の上にある一定の本性を生じさせ導きいれるのにもっとも望ましい規則、指針、指導」<sup>(13)</sup>を教えてくれるものが形相なのである。同一の本性が雑多の物体に実現されているがゆえに、形相は「相異なる質料における同一の本性」の統一性をなすものであり、<sup>(14)</sup>物体の構造を規定する諸「結合形相」(formae copulatae)の統一様式を示している。<sup>(15)</sup>また、複合的な形相にはその実現のいわば積分的な自然過程があつて、われわれの感知し得ない諸因果が鎖をなしている。<sup>(16)</sup>わたしはさきにペイコンにおける形而上学と自然学との区別に言及したが、上述のような形相を一般的ながたで研究するのが形而上学であり、質料におけるその特殊な結合の様式やその特殊な形成の動きを研究するのが自然学なのである。

ところで、上述のような質料との関係におけるペイコンの形相概念の内容には、メカニスティックな見方とダイナ

ミックな見方とがなお共存しているように思われる。まず、熱について例証されているところからも明らかのように、形相は、一定の種差によって区別されるところのある一つの運動という意味において「真なる種差」<sup>(18)</sup>なのであり、したがって質料の運動一般の規定性として「純粹作用の法則」にはかならないのである。<sup>(19)</sup>このようなメカニスティックな形相概念がデカルトの運動法則の概念に直接連なっていることは、明らかであろう。<sup>(20)</sup>しかし、他方また、自然の形相は、諸物体の諸特性を生みだす運動の原理として、質料のうちの「欲求」<sup>(21)</sup>でもある。すなわち、ペイコンによれば、「物体は、それがいかなるものであると、また感覚をもっていないにしても、すべて知覚をもっていることは、たしかである。事実、ある物体は、他の物体に出合うときには、そこに一種の選択が働き、その結果快いものが包みこまれ不快なものが押しのけられる。また、その物体が他の物体を変えたり、あるいは他の物体によって変えられるときには、いつでもその作用に先立って知覚が働いている。というのは、もしそうでなければ、これらの物体はすべて互いに同じものになってしまうであろうから。そしてしばしば、この知覚は、ある種類の物体においては感覚よりもよりいっそう微細であり、それに比べれば、感覚は鈍いものと思われるほどである。ある器具は、人間のあばけない場合にも、暑さ寒さの氣候の小さな差異をも感ずることを知っている。……もつとも微細な知覚を探究することは、非常に貴重な探究の主題である。なぜなら、自然を開明するために、それは感覚とは違つたいま一つの鍵であり、しばしばよりいっそう優れた鍵であるからである」<sup>(22)</sup>。ここに見られるダイナミックな形相概念が、テレシオラルネサンスのイタリア自然哲学者における力の概念に直接連なるものであることは明らかであろう。<sup>(23)</sup>

4・4・4 それでは、ペイコンはメカニストなのか、ダイナミストなのか。カルテジアンなのか、テレシオ派なのか。理論的に割り切ること、歴史的に学派区分をすることは、さし控えよう。<sup>(24)</sup> 上述のように、メカニスティックな

運動法則の概念とダイナミックな力の概念とが混在しているのが、ベイコンの実相である。むしろ、ベイコン自身がこうした自分の歴史的位置をどのようなものとして受けとっていたかに興味があろう。さきに述べておいたように、<sup>(26)</sup>かれは『ノヴム・オルガヌム』を完成するかわりに、その晩年を自然誌、実験誌の収集に捧げたが、それは次のような自己の位置づけによるものであった。すなわち、「それらは現に自然誌のいわば入口のしきいの上にいるわれわれにとって、はるかかたに見えるものである。ひとが自然誌にもっと没頭するならば、それだけ明らかに認識していくことであろう。しかし、われわれは、自分たちがそれに固執するものでないことを、あらためて確認する。ここにおいてもわれわれは、方向づけを確信しているのであって、われわれの位置について確信をもっているわけではない」<sup>(26)</sup>。すなわち、ベイコン自身、経験的素材の収集の段階では、たとえ方法による方向づけはもつにせよ、いかなる理論的立場にも固執しないのである。その経験的方法を受けつぎながらも、その学派的な自然学説には批判的であったテレシオに直接関連して、ベイコンは、「しかしわたくしいかなる一般あるいは全体的な理論をも唱えようとは思わない。なぜなら、そうする時 (tempus) はまだ来ていないように思われるから」といっている。<sup>(27)</sup>ベイコンをしてテレシオ派とすることはすでに時機おくれであるし、カルテジアンとすることはなお時期尚早である。しかし、それよりも歴史的に意味のあるのは、ベイコンにおける時の観念であらう。本節冒頭のアフォリズム (Aph. 4) にたちかえっていうならば、それは、人間に不可知なるものを、永遠に定めたものではなく、時において認めたものなのである。

(1) FOWLER, p. 192.

(2) NO, I, 66. cf. NO, I, 50, 51, 75; AL, II, 20, 7.

(3) NO, I, 75. cf. NO, I, 51.

(4) NO, I, 66. cf. NO, II, 5.

- (5) *N.O.*, I, 75.
- (6) cf. *Temporis Partus Masculus* (vol. III, p. 531). ガレハスの著作とは *De naturalibus facultatibus* のことである。
- (7) cf. *N.O.*, I, 3, 6. これらのアンタリスムは、本文中で問題としているアンタリスム (Aph. 4) の前後の脈絡をなしているものである。
- (8) 「研究 (二)」 七へ八ページ参照。
- (9) 同、九ページ参照。
- (10) DESCARTES, *Regulae ad directionem ingenii*, Regula XII (*Œuvres complètes*, éd. ADAM et TANNERY, tome X, p. 422).
- (11) cf. BECK, *The Method of Descartes*, p. 280.
- (12) *N.O.*, II, 1.
- (13) 自然のアメンタメントについては *N.O.*, I, 121; *D.A.*, I, (vol. I, p. 461); IV, 2 (vol. I, p. 589) 参照。単純本性はアリステテレス的表現をかりて ἀπλῆ とよばれる。cf. *N.O.*, II, 5, 17; *D.A.*, III, 4. (vol. I, p. 566).
- (14) *N.O.*, II, 4.
- (15) *N.O.*, II, 3.
- (16) cf. *N.O.*, II, 5, 17, 24; *D.A.*, III, 5. (vol. I, p. 574). 諸形相の結合様式は schematismus latentis とよばれる。
- (17) *N.O.*, II, 1, 5, 6. cf. *N.O.*, I, 50; *Cogit. de Nat. Rerum*,

ch. 4 (vol. III, p. 21). 積分過程は metaschematismus, latentis processus とよばれる。

(18) cf. *N.O.*, II, 20.

(19) cf. *N.O.*, II, 17; I, 151. Valerius Terminus とおしえて “the highest generality of motion or summary law of nature” と称されている (vol. III, p. 22)”。cf. LEVI, *Il pensiero di Francesco Bacone*, p. 250.

(20) たとえば、色の幾何学的メカニズムに関して Valerius Terminus (vol. III, p. 237) と DESCARTES, *Regulae*, Regula XII とを比較してみれば、この点は明らかである。

(21) *Instauratio Magna*, Distributio Operis. cf. *N.O.*, II, 48; *D.A.*, III, 4 (vol. I, p. 560).

(22) *Sylva Sylvarum*, Cent. IX (vol. II, p. 602). cf. *D.A.*, IV, 3 (vol. I, p. 610, 611).

(23) cf. OLSCHKI, *Telesio*, p. 199.

(24) たとえば、ホワイトヘッドとベルクソンは、ともにダイナミックな自然観において親近でありながら、前者はダイナミックな側面のゆえにペイロンを高く評価し、後者はメカニミックな側面のゆえにペイロンに対して否定的である。こうした関係はある意味でおもしろいけれども、ペイロン研究を進めるものではない。cf. WHITEHEAD, *Science and the Modern World*, p. 58-59; BERGSON, *La pensée et le mouvant*, IV.

(25) 「研究 (一)」 一・五 参照。

(27) N.O., I, 116.

(26) *Thema Coeli* (vol. III, p. 780).

## 五、「最大の謎」のアフォリズム

5・1 (Aph. 93) 「さて、まず神から始められるべきである。というのは、ここでなされる仕事は、それ自身の善のすぐれた本性のゆえに、明らかに、善の創造者 (author boni) であり光の父 (pater luminum) である神からきていることは、疑いなくである。ところで、神のもろもろの業 (operationes) においては、どんなささやかな端緒も必ず成果 (exitus) をもたらすにちがいない。そして、霊的な事柄について言われていること、すなわち『神の国は見られるかたちで来るものではない』ということは、神の摂理の大きなすべての業 (opera) においても同様なのであって、万事はなんのきしむ音もさわぐ音もたてずにすらすらと進み、その事が行なわれているのを人びとがそれと気づいて認めないうちに、着々と事は運ばれるのである。……」

5・1・1 このアフォリズムは、コロンブスがあの驚くべき大西洋横断の航海のまゝに未知の新大陸の発見に対する期待理由を述べたのと同じように、ペイコンが自分の新しい仕事に対して希望をいだかせるべき推測的根拠をあげた個所の冒頭に掲げられているものである。これまで、この種のテクスト群は、注釈者および解釈者たちによって、まったくといってよいほど無視されてきた。ファウラーもただ「ルカ福音書」からの引用句「神の国は云云」の章節 (xvii, 20) をしているだけである。しかし、多少ともこのような内容を直接に言い表わしているアフォリズム群は『ノヴム・オルガヌム』のなかだけでもゆうに一〇以上をかぞえるのであり、しかも、先述の根本思想の分析から

見ても、<sup>(1)</sup> ベイコンの哲学思想の形成にとって末梢的なことでないばかりか、きわめて主要なものに属するのである。これらのアフォリズム群はその正当な位置と重要性において見なおされなければならない。

5・1・2 さて、それらアフォリズムは、『ノヴム・オルガヌム』の第一部の末尾の部分にも第二部の結語の部分にも見いだされる。すなわち、第一部の末尾では、「最後に、学問と技術が邪悪と贅沢などに墮すると非難するものがあったも、それに動じてはならない。というのは、才知、勇気、力、美、富、光自体その他、地上のあらゆる善について、同じことがいえるからである。ただ人類が、神の贈与によって人類のものになっているところの、自然に對する權利を回復して力を与えられさえすれば、公正な理性 (*recta ratio*) と健全な宗教 (*sana religio*) とがその行使を導くであらう」と述べられている。<sup>(2)</sup>そしてこれに呼応するかのよう、第二巻は次の句によって結ばれている。

「思うに、人間は墮落によって無罪の状態と被造物に對する支配を失った。しかし、それら両者は現世においても部分的には回復され得ないわけではない。前者は宗教と信仰とによって、後者は技術と学問とによって。というのは、被造物は神の呪咀によって全くどこまでも逆らうものとされてはいないからである。そうではなく、あの神勅『あなたは額に汗してパンを食べる』によって、被造物は、(たしかに、論争や怠惰な魔術的儀式によってではないが) さまざまの労働により (*per labores varios*)、ついになんらかのしかたで、人間にパンを供給するように、すなわち、人間生活の役にたつようにさせられるのである。<sup>(3)</sup>ここに見られるように、信仰による罪のつぐないとならんで学問技術によって自然に對する人間の支配權を回復すること、その權利自身神の贈与によって人間に所屬すること、つまり神に由来すること、しかも、その支配の実現はスコラ学や迷信的魔術によるのではなくて労働およびそれにもとづく学問と技術によること、したがって、この神に由来する人間の權利にもとづく仕事は神の摂理の大きな業と同じよ

うに静かに貫徹されるであらうこと、これらがペイコンの新しい哲学の基調をなすものである。かれの仕事はもとと、『ノヴム・オルガヌム』の副題にも示されているように、自然の解明にもとづいて自然を支配する「人間の王国」を建設することにあつたが、かれによれば、学問の基礎のうえにうちたてられる人間の王国 (regnum hominis) に入ることは、幼な子としてでなければ入ることを許されない天国 (regnum coelorum) に入ることとたいした違いはない」のであつた。

ここで注意されるべきことは、「光の父」なる神に由来する「人間の王国」の建設が、墮落後の人間の労働における神の業の模倣にもとづいて——「神の国」が時において現われるように——歴史において実現するとされている点である。しかし、すぐのちに見るように、認識対象の存在と認識実現の歴史性との関係は、なお直接には語られない矛盾として残るのである。

5・1・3 わたしはさきに、ペイコンの根本思想を明らかにしてかれの思想の営みの深部の動きに言及したさいに、みづから「人間精神の農耕詩」にたとえたかれの哲学において、農耕の発明をはじめとする人間の発明 (inventio) が人間精神のたんなる「案出」(excogitatio) ではなくて、かえって「神の業の模倣」(divinorum operum imitamenta) あるいは「新しい創造」(nova creatio) として洞察されていたことを見た。かつて早く「知識の礼讃」(一五九二年)のなかで「発明において自然に導かれる」といわれ、後年——周知のとおり——「自然に服従する」と表現されたところのものは、実に、この「模倣」にはかならない。先述のように、この「神の業の模倣」は、とりもなおさず、ユピテルのためにカピトルを建立する人間の高慢を挫いて、謙虚に、「知性のうちに世界を模範として神聖な殿堂」を築かせるものであつた。このようにしてペイコンは、「そこで、わたくしはその模範に従う。というのは、存在する

に値するものは何でも、また知られるに値するのである。なぜなら、知識は存在の映像 (imago) であるから。」とい  
い得たのである。<sup>(10)</sup> ここで「映像」とは、認識における「模倣」のことにほかならない。そこには、ペイコンの哲学思  
想の深部において、存在と知識との関係、学問と信仰との緊密な結びつきがいかなるものであったかが示されている。  
すなわち、一言でいえば、存在の反映としての知識という把握は、神の業の模倣としての人間の労働という把握に裏  
づけられていたのである。わたしがさきに「一定のキリスト教の信仰と結びついた唯物論者ペイコン」といい、「一  
定の宗教の認可と結びついた活動的な哲学」といったものは、すなわちこれである。<sup>(11)</sup>

上述の「映像」と「模倣」——すなわち知識と発明——は、神の創造の業の映像であり模倣であるがゆえに、神的  
榮譽 (honor divinus) が与えられる。かつてギリシア、ローマの古人たちのあいだでは、都市と帝国の建設者、立法  
者など国事に功績のあった人びとには英雄ないし半神の榮譽 (herois honor) が認められたが、神化 (apotheosis,  
relatio inter divos) はただ新しい事物の発明者だけに許されたのだった。<sup>(12)</sup> ペイコンは、この古人たちの判断を正しい  
として次のようにいっている。すなわち、「思うに、発明者たち (inventor) の恩恵は人類全体に及び得るのに、政治  
上の恩恵は人類のただある特定の地域にしか及ばないし、また後者が二、三代しか続かないのに、前者はいわば永遠  
に続くのである」。<sup>(13)</sup> しかも、発明は暴力と混乱なしに (sine vi et perturbatione) 恩恵を与える。これこそ前掲のアフ  
オリズム (Aph. 93) で「きしむ音もさわぐ音もたてずに」といわれていたことの意味にはかならない。<sup>(14)</sup> ペイコンは、  
このような神的榮譽に値する仕事を、自分の『大革新』の事業の目標として定めたのである。

5・1・4 しかし、それだけにはとどまらない。神的榮譽に値する発明を目標とすることは、さきにも言及した  
ように、<sup>(15)</sup> いわゆるルネサンスの三大発明のたんなる影響というようなものではなくて、むしろ積極的に発明に対する

鋭い洞察をふくんだものであった。すなわち、ペイコンは、「どんな帝国、どんな宗派、どんな星も、あの機械技術 (mechanica) がなした以上に、人間の状態に大きな効力といわば波及をおよぼしたものはない」ことを卒直に認め、未開で野蠻な地域 (ニュー・インディア) と文明の進んだ地域 (ヨーロッパ) との人間の状態の差異が「土地や気候や体力によるのではなくて技術による」ものであることをはっきり確認したうえで、ひるがえって、それらの発明のからくりを省察しているのである。すなわち、かれによれば、大砲や羅針盤は、それらが発明されるまでは、「自然の驚異」 (magnalia naturae) であって人間に模倣できないものとされていた類のもの (類) の発明であり、印刷術は「足もとにある」 (ante pedes posita) のに気づかれなかった類のもの (類) の発明である<sup>(18)</sup>。しかし、それらの発明は、いずれにしても、偶然になされたのであり、したがって、「人間の理性と勤勉と一定の方向と努力から、はるかに多くのよりよい発明がいつそう短期間になされると希望してよい」<sup>(19)</sup>のであった。要するに、ペイコンは、偶然的な発明を必然的な発明に転化させ得るという期待のもとに、それを可能ならしめる媒介となる方法の探求を企てるのである。つまり、発明の方法の発明である。これは、前掲のアフォリズムに示されていたように、「光の父」なる神とふかく結びつくものであった。

(1) 「研究 (二)」 2・2・4 参照。

(2) N.O., I, 129. このアフォリズムをはじめ以下同群のアフォリズムに対してファウラーは一律に注釈をおろそかにしており、そこから以後のペイコン解釈においてもそれらに対する軽視が生まれているように思われる。シュールは、「科学の悪用の危険」という角度からこのアフォリズムに注意をむけてい

る。cf. SCHUHL, *La pensée de Lord Bacon*, p. 28.

(6) N.O., II, 52. 「人間の墮落」について cf. D.A., I (vol. I, p. 465); *Instauratio Magna*, Praefatio (vol. I, p. 132); Valerius Terminus (vol. III, p. 217-218, 222). 『あなたは額に汗して云云』はじうまでもなく「創世記」(III. 19) からの引用であるが、ペイコンにおいて「墮落」のはじまりは自然的知識によ

つてではなく道徳的知識の野心と支配欲によると考えられている。

(4) "Aphorismi de interpretatione naturae et regno homini."

(5) *N.O.*, I, 68. 「幼な子としてでなければ云々」は「マタイ福音書」XVIII. 3 からの引用である。このアフォリズムと併行に次のものが参照されてよいであろう。「解明は、普通の意見の人びとには、ほとんど信仰の秘義と同じように、なかなか耳ざわりでうけいれにくいもののように思われるのも、やむを得ないことである」(*N.O.*, I, 28)。

(6) 「研究 (二)」 2・2・4 参照。

(7) *Praise of Knowledge* (vol. I, p. 130).

(8) *N.O.*, I, 3, 129.

(9) 「研究 (二)」 2・2・2 参照。

(10) *N.O.*, I, 120. cf. *A.L.*, I, 4, 8.

(11) 「研究 (二)」 まえがき 一・一 参照。

(12) ヲイコンは、前者の例としてヘラクレス、テセウス、ミノス、ロムルスを、後者の例としてケレス、ベックス、メルクリウス、アポロをあげつづる。cf. *A.L.*, I, 7, 1; *D.A.*, I (vol. I, p. 470).

(13) *N.O.*, I, 129. なお、これは「イコンによる野心の三種類の区別と関連している」。「研究 (二)」 2・2・1 参照。

5・2 「光は神的なものと自然的なものとの媒介者である」という伝統的な規定に不満を感じ光の自然学的究明

(14) *N.O.*, I, 129. なお次のようにも表現されている。「前者はまた『争い (strife) と騒動 (perturbation)』をまじえているが、

他方後者はまた、神の臨在の特性を真にそなえていて、騒音 (noise) も立てず騒乱 (agitation) もなした『細い声』 (*aura levis*) 現われるのである」(*A.L.*, I, 7, 1)。

「イコンが革新に関し、政治上のそれと学問上のそれとを区別しているアフォリズムは、これと関連している。たとえば「政治上のことと学問上のことには、たしかに、大きな相違がある。というのは、新しい政治の動きと新しい学問の光とからおこる危険は、けっして同一ではないからである」(*N.O.*, I, 90)。

(15) 「研究 (二)」 2・2・3 参照。

(16) 印刷術、火薬あるいは大砲、羅針盤の発明を、「三大発明」と呼ぶこうした見方自身、イコンに由来しているものである。それらの発明は、当時においてはなお「古代人に知られていないところの、そしてその起源が最近のものであるのに不明ではなばなくところの三つの発明」であった。cf. *N.O.*, I, 129.

(17) *N.O.*, I, 129.

(18) *N.O.*, I, 109, 110. cf. *A.L.*, II, 2, 13.

(19) *N.O.*, I, 108.

に着手しながらも、他方ではなお「自然の光」を「光の父なる神」に由来するものとして人間の認識を価値づけることは、デカルトと同じく、ベイコンにおいても見いだされる当時の思想動向であった。<sup>(1)</sup> 次には、このような脈絡のうちでベイコンの学問の価値づけに関して解釈の分かれるものになっているアフォリズムをとり扱わなければならない。それは、すなわち次のアフォリズムである。

(Aph. 129)「……ある特定の発明の効用が人びとをたいへん感心させ、そのためにある恩恵によって人類全体が恩を蒙り得るような発明者が人間以上のものと見なされるとすれば、他のあらゆるものがそれによって容易に発明され得るところのもの (aliquid per quod alia omnia expedite inveniri possint) を発明することは、それよりいかにほど尊いと思われることであろう。……迷信も欺瞞もなく、誤謬も混乱もない、あるがままの事物の観想 (contemplationum prout sunt) は、それ自体で、もろもろの発明の成果 (fructus) のすべてよりもいっそう価値がある。」

5・2・1 個々の発明を容易にさせる、発明の方法の発明は、あるがままの事物の観想によって見いだされるものであり、たとえていえば光によって他の何ものかを見ることに對して、光そのものを見ることといつてよい。ベイコンが、「経験の正しい順序は、まず燈火をともして、ついで燈火によって道を照らすことである」<sup>(2)</sup>として、同じく実験を重んじるといっても、「成果をもたらす実験」(fructifera experimenta)ではなしに「光をもたらす実験」(lucifera experimenta)を求めるべきだとするもの、こうした考えにもとづくものであった。すなわち、「経験を正しく進め、それによって新しい仕事を生みだすには、神の知恵 (Divina Sapientia) と順序をそのまま模範とするべきである。ところで、神は創造の第一にただ光だけを創造して、その業にまる一日をあて、その日には物質的なものは何も創造しなかった。それと同じように、どんな種類の経験からも、まず第一に原因と真の一般的命題との発明をひ

き出すべきである。成果をもたらす実験ではなしに光をもたらす実験を求めるべきである<sup>(3)</sup>。

以上のことから、前述のペイコンのいわゆる「神の業の模倣」においては、「光の父」なる神のその光自体を見ることであるところの、「あるがままの事物の観想」がもつとも価値あるものとされ、そのためにまた「光をもたらす実験」が要求されていることがわかる。このような観想によって得られる映像こそがまさに「世界の真の模型」(verum exemplar mundi) にはかならない。これはおおくの実験の労苦にもとづいて導きだされるものであって、各人が各個の理性によってうちたてたり、人びとの空想がもろもろの哲学のうちにづくりあげた「世界の、ばかげた、いわば猿まねの模像」(modulos ineptos mundorum et tanquam simiolas) とはちがう<sup>(4)</sup>。ちぎ<sup>(5)</sup>のものが「神の精神のイデア」(divinae mentis ideas) の正しい映像であつたのに対して、これは「人間の精神のイドラ」(humanae mentis idola) である。これら両者を対比させてペイコンは次のようにいう。すなわち、「人間の精神のイドラと神の精神のイデアとのあいだには、ゆゆしい相違がある。すなわち、からつぽの臆断と、見いだされるがままの、被造物につけられた真実の印や跡形とのあいだには、容易ならぬ違いがある<sup>(6)</sup>」。また、次のようにも説明する。すなわち、「前者は勝手な抽象物 (abstractiones ad placitum) 以外の何ものでもない。他方、後者は、真実の精細な線で物質のうちに印され定められたとおりの、被造物につけられた創造主の真実の印章 (vera signacula Creatoris super creaturas) である<sup>(7)</sup>」。したがって、真実の知識は「創造主が被造物のうえに残された跡形と印についての黙示録」だということになる。ここまでくれば、イドラ論がペイコンによって「精神のあがないときよめ<sup>(8)</sup>」と呼ばれたとしても、もはや不思議なことはないであろう。いわゆるイドラ論は、自然を支配する「人間の王国」に入るのに必要とされる、いわば「幼子」のペルソナに至るためのものであつたのである。

5・2・2　ところで、前掲のアフォリズムのなかで「あるがままの事物の観想 (contemplatio) は、それ自体で、もろもろの発明の成果 (fructus) のすべてよりもいっそう価値がある (magis digna est)」といわれている個所は、ペイコンの学問の価値観についての解釈において、大きな別れ道の一つとなったものであり、また他のテキストの読み方の批判にも関連してくるところのものである。

まず、そこからは、ペイコンが学問の目的について語るときにいつもいうあの、真理の実践への従属という考え方には相反するものが、感じとられるであろう。<sup>(8)</sup> 事実、ペイコンは、それまでに諸学がほとんど進歩しなかったことの有力な原因の一つとして目標の定め方のうえでのまちがいをあげ、次のように述べているのである。すなわち、「それは、目標 (meta) そのものが正しく置かれ定められていない場合には、正しく進路を進むことができないということである。ところで、諸学の真の正しい目標は、人間の生活に新しい発明 (inventi) と物資 (copiae) を供給すること以外の何ものでもない」。<sup>(10)</sup> 真理の観想よりも実用の知識を重んじる、このような考え方は、ペイコンの実用主義的な立場として広く知られているものであり、ペイコンにおける「プラグマティズム」とか「功利主義」とか呼ばれてきた立場である。たしかに、同様の考え方は、その他にも多く見いだされ、<sup>(11)</sup> ときには次のような鮮明な表現さえ与えられている。「ただ満足だけをめざす知識は、結実と出産のためではなしにただ快楽のためにある売春婦のごときものである」。<sup>(12)</sup> これをもし実用主義というならば、それは前掲の観想の尊重とどのように結びつくのであろうか。多くの解釈者のいうように、それらは相反するものなのであろうか。

5・2・2・1　さきにペイコンの根本思想を述べたさいに言及しておいたように、<sup>(13)</sup> いわゆる近代経験主義は当時現存の社会的から自己を独立させた個人的自我のなかで誕生したのであり、それが実用を趣旨としたにしても、そ

の実用は当時すでに受けいられていた社会的利得や教職の義務の便宜に役立つというような意味での実用ではあり得なかった。上掲の実用主義的目標の設定とも見られる、その同じアフォーリズムにおいても、「人間の生活に新しい発明と物資を供給する」ということは、「自分の職業 (professorium)」、利得 (lucrum)」、名声 (existimatio) などの便宜に役だてる」こと、つまり「社会生活の便宜」(viae civilis compendia) とはつきり区別されている。<sup>(41)</sup> いな、それに對置されてさえているのである。ベイコンにあつては、一方、当時現存の社会生活におけるかれの「社会目的」と、他方それと絶えず葛藤をつづけていた「観想目的」との関係が根本にあったことが、ここでふたたび想起されるべきであろう。当時の現状においては、たんにベイコンの実用主義的目標がまだ実現されていなかっただけでなく、なおその目標を満たすべき仕事それ自身が支配的な職業に反し、利得に反し、名声に反するものだったのである。したがって、その実用主義的目標が、上掲の同じアフォーリズムのなかで、また「仕事の新しい保証 (novus pignus)」と一般命題の新しい光 (nova lux) とに導くような真理」といいかえられているとしても、なんら不思議はないのである。

5・2・2・2 さて、真理の「観想」を実用的成果よりも尊重している、解釈の別れ道になっている、問題のアフォーリズムにたちかえろう。それは上述のようなベイコンの実用主義的な立場に反する、注釈者のいわゆる「めでたい例外」<sup>(42)</sup> となっているテキストなのであろうか。

そこでは、まず、多数の個々の諸発明をまとめて容易にするところの法則をあらわす一般命題を発見し、そうした「光を見る」ことは、個々の発明の与える恩恵よりもはるかに大きな恩恵を与えるがゆえに、いっそう尊い (celsius) とされている。しかし、このような意味での尊さは、そのもたらす発明の成果の大きさのゆえであつて、実用主義的な立場と矛盾するわけではない。

この点は、「成果をもたらす実験」に対する「光をもたらす実験」が、それ自体としては何の成果をもたらさないのに、前者よりも多くの成果がそこからまとめて導きだされ得るという説明によく表わされている。すなわち、ペイコンは、かれの「光をもたらす実験」のうちに、通俗の理解力にとってはあまりにも好奇的で何の役にもたないと思われる実験が含まれていることに對する弁明として、この種の実験を無益と考えるのは、あたかも「光が固体的なものでも物質的なものでもないがゆえに、何の役にもたないと考えるのと同じである」と述べている。<sup>(16)</sup> すなわち、自然現象の法則の基礎にあるかれのいわゆる「單純本性」<sup>(17)</sup> についての知識は、それ自体は (being) たいして役にたたないが、「もろもろの仕事の普遍的な内奥への通路を開き、また仕事の全軍勢ともっとも高貴な源泉とを、能力として (potestate) は、含みひきつれているのである」<sup>(18)</sup>。要するに、「光をもたらす実験」によってもたらされる普遍的真理——光——についての知識は、それ自体は (in se) 何の役にもたないが、能力として、(potestate) 大きな成果をみちびくというわけである。

5・2・2・3 それでは、そのような真理についての知識、光を見ることが、他との関係で有用としても、それ自体にもつところの、その能力とはいかなるものであろうか。それはペイコンによっていかに理解されていたのであろうか。この論点こそ、まさに、これまで述べてきた大きな解釈の別岐点そのものにあたるものである。なぜなら、ペイコンは、普遍的真理の観想は、前掲のように、そのもたらす多大の成果のゆえにそれを尊いとしているだけではなしに、さらに「それ自体で」(in seipsa) 諸成果にまさる価値ありとしているからである。

すなわち、(Aph. 129) 「……光を見ること自身、光の多くの効用よりもすばらしく美しいことである。……あるがままの事物の観想は、それ自体で、もろもろの発明の成果のすべてよりもいっそう価値がある」〔傍点——引用者〕。

つまり、それ自体なんの成果でもなく、何の役にもたたないものが、それ自体で価値ありとされているところにこそ、まさに論点がある。

多くの解釈者は、真理と実践の主従関係、すなわち実用主義か観想主義か、の観点からのみこのテキストを割り切ろうとしているかのようである。こうした観点がアイコンのテキストのうちに形式的な自家撞着を指摘するに至るのは当然であろう。むしろ、アイコンにおいて、観想のそれ自体としての価値が、成果——すなわち、新しい発明と物資の供給——のもつ人間生活への価値とは別の次元で、いかなるものとして理解されていたかが究明されるべきであろう。それは、もつとも明確には、次のように規定されている。すなわち、「光をもたらず実験」について、アイコンは次のように述べるのである。「ところで、それは、それ自体に (*in se*) 驚くべき性能 (*virtus*) と性状 (*conditio*) とをもっている。すなわち、けっして偽ったり欺いたりしないということである。というのは、それが適用されるのは、何かある所産 (*opus*) を生みだすためではなくて、あるものにおける自然的原因 (*causa naturalis*) を明らかにするためであるから、どのような結果になろうと、疑問を解決してひとしく意図を満足させるからである。」<sup>(19)</sup> このように、けっして偽ったり欺いたりせずに、つねに疑問を解決して、光をもたらずこと、これが成果を生みだすための仕事に対して、真理を知るための仕事のもつ、それ自体における価値である。この価値が実現されるためには、「成果をもたらず実験」を提えていた制約がとりのぞかれなければならない。すなわち、自分の仕事に役だたないところのものにも心向け (*animum erigit*)、手をのびさ (*manum porrigit*) なければならない。そして、こうした制約がとりのぞかれたとき、「光をもたらず実験」において、結果がどうであれその結果は、真理の、偽りもせず、欺きもしない保証となるのである。そしてまた、こうした見地からみる場合には、「成果をもたらず実験」においても、そ

の成果である所産は、真理の保障という価値を帯びることになるのである。<sup>(20)</sup>

5・2・3 以上において「真理の観想」のもつ、あらゆる成果より高い価値を分析するにあたって、「光をもたらし実験」を手掛りにした点に、多少の疑問が生じるかも知れない。科学における理論と実験との差別がこんにちでは常識となっているからである。しかし、前述のように、ペイコンにおいて「観想」がなお科学的認識のための実験（「光をもたらし実験」）を十分含意して、当時現存の社会的便宜のための恣意的な実践と対置されていたことを、ここにあらためて想起すべきであろう。いな、むしろ、かれにおいて、「光をもたらし実験」は、真理の光そのものの「観想」における不可欠の、重要な契機とさえ考えられていたのである。それは、「宗教において信仰が業によって（ex operibus）証明されねばならないと戒められているのと同じように」<sup>(21)</sup>とまで述べられている。布衍するというならば、前述の「神の業の模倣」は、ただその業の所産である被造物を静観することによってなされるのではなく、まさに人間の業——実験、実践——を通じてなされるのである。これに比べれば、たんに事物を静観することとは、神ないし人間の業の成果としての所産を眺めるだけのことであって、それを創造した力を観想することではない。「光によって見る」と（visio per lucem）と「光を見る」と（visio lucis）との深刻な相違は、実にここにあるように解されるのである。そして、いわゆるペイコン実験、哲学の基礎もまさにこの点——すなわち、所産の静観ではなくて生産の観想、つまり「光によって見る」とではなくて「光を見る」と——に存するように思われる。それは「感覚」と「実験」との対比として、かれによって次のように述べられている。「いっそう正しい自然の解明は、すべて、事例（instantiae）と適切かつ妥当な実験（experimenta）によってなしとげられる。そのさい、感覚（sensus）はただ実験について判断するだけであり、自然（natura）と事物自体（res ipsa）については実験が判断する」<sup>(22)</sup>

なお、ここで注目し値するのは、実験こそが、前述(5・1・2)の認識対象の存在と認識実現の歴史性との矛盾を解く鍵であることが、ハイコン自身によって示唆されている点である。すなわち「ハイコンは、「道を歩めば、その通過した道程を進むだけでなく、残りの道程がいっそうよく見える」ことになぞらえて、学問においても「発明の術は発明とともに成長する」といい、その根拠を、「事物との交わりについて考察する」点に求めているのである。<sup>(28)</sup>

(1) 光の自然学的発明の企てと云ふのは、cf. *D.A.*, IV, 3 (vol. I, p. 612); *Sylva Sylvarum*, IV, 352 (vol. II, p. 456). DES-

CARTES, *Principiae Philosophiae*, IV, §91.

(2) *N.O.*, I, 82. cf. *D.A.*, V, 2.

(3) *N.O.*, I, 70. cf. *N.O.*, I, 82, 99, 121.

(4) *N.O.*, I, 124.

(5) cf. CAMPANELLA, *Metaphysica*, pars I, lib. I. Proemium. それ以外「神の精神 (mens Dei) のちやど何ものかを潜在的にイデオとして (idealiter) もらわっているようなものは、何一つとして世界のうちになん」と言われている。

(6) *N.O.*, I, 23.

(7) *N.O.*, I, 124.

(8) *N.O.*, I, 69.

(9) フォウラーはそのように解釈し、他とはまったく相反する例外的な叙述であると云っている。cf. FOWLER, p. 337.

(10) *N.O.*, I, 81.

(11) たとえば「ところで、目標は、人類に新しい産物と諸

力を供給すること以外の何ものでもない」(*Cogitata et Visa*, vol. III, p. 595)。

(12) *Valerius Terminus* (vol. III, p. 117-224). cf. *A.L.*, I, 5.11.

(13) 「研究(1)」を参照。

(14) *N.O.*, I, 128. cf. *N.O.*, Praefatio; *D.A.*, I (vol. I, p. 462-463).

(15) FOWLER, p. 337.

(16) *N.O.*, I, 121. cf. *A.L.*, II, To the King, II. カリブルの腕のよう運動の役にたつわけでもない、また頭のように理解の役にたつわけでもない胃に、有益な諸学の基礎としての哲学や一般原理がたとえられている。

(17) 「研究(1)」を参照。cf. Ellis' General Preface to *Bacon's Philosophical Works* (vol. I, p. 25-39); FOWLER, p. 324.

(18) *N.O.*, I, 121. cf. *N.O.*, I, 70.

(19) *N.O.*, I, 99.

(20) *Ibid.* cf. FOWLER, p. 329.

(21) cf. *N.O.*, I, 73. それでは「成果と発明された所産は、哲

学の真理性のために、いわば保証人と身元引受人になっている」といわれている。

(22) *N.O.*, I, 50. cf. *Instantatio Magna*, *Distributio Operis*.  
(23) *A.L.*, II, 13, 10; *N.O.*, I, 130.

5・3 最後に、従来テキストの読み方のうえで全巻中もつとも議論のあった個所について論及しておかなければならない。それは、これまで詳しく論じてきた問題と内容のうえで密接に関係している個所でもある。すなわち、

(Aph. 124)……*Itaque ipsissimae res sunt (in hoc genere) veritas et utilitas: atque opera ipsa pluris facienda sunt, quatenus sunt veritatis pignora, quam propter vitae comoda.*

前半、すなわち句読点コロンの前の読み方に問題がある。後半は、「[仕事]」所産そのものも、生活の便益のゆえにというより、それら所産が真理の保証であるかぎりで、いっそう価値があるとされべきである」というほどの意味であろう。

このテキストは、諸学の目標をその生みだす所産の人間生活に対する効用 (*utilitas*) にありとしたペイコンとして、諸学の真の目標は真理の観想 (*contemplatio*) にあるのではないかという他からの異論に答えた文脈のうちに見いだされるものである。ペイコンによれば、諸学の目標は、人間の知性のうちに「世界の真の模型」をうちたてることであり、こうした意味においてなら「真理の観想」といってよい。ただし、このような観想は、きわめて勤勉な (*diligentissimus*) 世界の分解と解剖なしには、なしとげられない。というのは、それは、物質 (*materia*) から切り離された勝手な抽象物である「人間の精神のイドラ」とはまったく異なり、物質につけられた真実の印である「神の精神のイデア」を内容とするものだからである。かくて、(*Itaque*) ‘この種のことでは (in hoc genere)’ すなわち、物質的な世界の勤勉な分解ないし解剖を通じてはじめて知性のうちにうちたてられ得る「世界の真の模型」——この種の

「真理の観想」——においては、〈ipsissimae res sunt veritas et utilitas〉ということになるのである。このように、物質および経験から切り離された古来の（「はるかに神的な状態」とされた）「抽象的な知恵の晴朗さと静けさ」（abstractae sapientiae serenitas et tranquillitas）のうちに世界を眺める、あの種の「真理の観想」との対比において、問題の前半の句が述べられていることは、明らかである。それでは、〈ipsissimae res sunt……〉とは、いかなる意味なのであろうか。

5・3・1 まず、古来の「真理の観想」においては、真理——それは物質から離れた抽象的なものである——と物質的効用とは無縁であってけっして合致しないし、また、このような効用から無縁なものとしての真理だけが肝要なもの、追求されるべき目標であった。そして、それとは対照的に、ペイコンの「真理の観想」においては、真理とならんで効用もまた追求されるべき目標であり、肝要なものであり、さらに真理と効用は合致する。このようにして問題の句〈ipsissimae res sunt veritas et utilitas〉を、エリスは「真理と効用が、まさにわたくしの追求するところのものである」と解し、これとほぼ同様にキッチンは「すべてのうちでもっとも主要なものは、真理と有用性である」と解する。ただし、これらは ipsissimae の意味上でやや無理ではないか、とファウラーは批判している。<sup>(1)</sup> スペディングは、ipsissimae の用語上やはり少し無理であることを認めながら、「真理と効用とは、まさに同じものである」と訳する。いずれも ipsissimae の意味のとり方で多少の無理を意識しながら、内容上文脈のなかにはめこんで読解するのである。これに対してファウラーは、それらとは違った意味で、「まさに諸事物そのもの（すなわち、自然の諸事実）は、真理でもあり効用でもある」と読む。つまり、ipsissimae res を文字どおり「まさに諸事物そのもの」とするのである。しかし、ファウラーがそれを経験的諸事実の意味にとつて、結局は経験的な真理の認識と行動

の規則との結びつきを述べたもの——これがベイコン学説の主要内容であるとフアウラーは考えている——と理解する点では、スペディングと内容上同じである。

5・3・2 テクストのこの個所の読み方についての議論は大体以上のとおりである。そこからは、少なくとも、*ipsissimae res* という用語に関して、それを「この上なく自体的なもの」の意味にとるのがもつとも無理がないとの方であるということが、論者の共通の見解として視られるであらう。

ところで、わたしは、さきに、これまでベイコンのテクストのなかの例外的なもの、あるいは注意するに値しないとされてきたものに特に注目して、それらを必ずしも例外的でないばかりか、かえって根本にかかわるものとして示してきた。特に、実験の所産が生活の便益上成果をもたらすのではなしに、真理の保証となり光をもたらすかぎりになされる場合に、それが実験でありながらベイコンの「真理の観想」の重要な一契機をなし、かつ、それ自体に、(目録)、けっして偽ったり欺いたりしないという特性をもっていることを見た。すなわち、「光をもたらす実験」の結果のもつ効力である。虚偽に対する真理であるところの「神の精神のアイデア」は、ベイコンにおいては、光の父である神が、物質につけた真実の印、つまり光それ自体であった。そのアイデアは、古来の「真理の観想」におけるそのように物質から切り離されたものではないから、実験を媒介としてのみはじめて観想されるのである。

上述のような全体の解釈が許されるとするならば、ここで問題のアフォーリズムは次のように読むことができるだろう。すなわち、「かくて、この種の真理の観想では、もつともそれ自体であるといえるものは真理であり、また効力でもある。ここで『また効力でもある』というのは、実験の所産そのものも、生活の便益のゆえにというより、それら所産が真理を偽り欺くことなく示すものであるというかぎり、いっそう価値があるとされるべきだからである。」

わたしはこのように読みかえたい。コンテキストのなかにうまくはまることはもちろん、用語の意味上でもなんら無理をせず、そのうえファウラーの読み方によるよりも、前半と後半との結びつき——つまり句読点コーロンのとり方——に多少の長所さえ感じるのである。

(1) cf. FOWLER, p. 329.

## 結 語

わたしは、最近五、六〇年におけるベイコンの理論的解釈の共通の基礎になっているテキスト注釈にたちかえて、そこに一連のいわば穴を見つけ、それとの関連で『ノヴム・オルガヌム』のうちからもっとも問題的なアフォリズムを五つの柱にまとめて、それを中心にむらがるテキスト群を分析した。そのさい、学説の構想過程を表現するテキストの性質にしたがって、表わされる思想内容の心髄に触れることに努めた。本論の仕事は、理論的に割り切ったもう一つのベイコン解釈を提出することよりも、テキストの読みを深めることに関心をもっている。この仕事が、たんに従来の注釈の穴を埋めただけではなしに、それを礎石としてテキストの中から、心髄に触れた新しいベイコン解釈の柱を建てることに役立ったとすれば、幸いである。わたしとしては、検討した問題的なアフォリズムのいずれもが自然(natura)と時(tempus)との矛盾を示し、それにもとづいて「自然の光」による学問の真理がベイコンにおいてまた「時の娘」でもあり、そうした二重性が「光の父」なる神の摂理によって、あるいは神の業の模倣である人間の労働によって、解かれようとしている姿につよい興味を抱いている。しかし、いまはむしろ、本論で最後に提出したアフォリズム(Aph. 124)の読みの訂正をもって、わたしのベイコン研究の完結のあかしとしたい。